
城下牢の呪術王

ライサンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

城下牢の呪術王

【Nコード】

N8264M

【作者名】

ライサンダー

【あらすじ】

世界は魔王の脅威にさらされていた。

これを打ち碎けるのは

異世界の勇者か、美貌の賢者か、寡黙な騎士か——それとも

別の誰かなのか……

これは英雄譚の皮を被った似非物語。

王道に唾を吐きかけ、正道をあざ笑う、一人の男のぶらり旅——

トリップでも転生でもない、純粹チートな主人公。
ハナから最強、故に無敵、故に世界で暇つぶし。

そんな奴が主人公。

序の話 異世界トリップ（前書き）

連載六本目

私なんて死ねばいい

序の話 異世界トリップ

「——暗い、暗いぞお、誰かランプ持って来い」

光という存在を忘れ去ったような暗黒の空間。
そこに響く声の一つ。

「あ、やっぱりランプいらねえ。そうだ、暇だ、暇すぎる。なんか暇つぶし持って来い」

人間の精神とは簡単なことで異常を来す。

常人ならば数分もいれば気が狂う、暗黒の冥府。
だが、その声は何ら揺れることはない、『普通』の声色。

——それこそが、最大の『異様』

「退屈だ。退屈すぎて死にそうだ。何回言っただよ、コレ。知るかよ。数えてるわけあるか阿呆が。誰が阿呆だ！ああ、俺か。

アル、アルはどこ行った？ああ、そうか。死んだんだった……ああ、退屈だ。退屈すぎて死ねる——まあ、死ねないんですけどー」

ハハハハと、乾いた嗤いを漏らす声の主。

闇の中にそぐわぬ緩んだ声が、一層の異様を煽り立てる。

「ふう………虚しい、俺は虚しいぞ、ハーロック。とうとう独り言で会話しちまったよ………うむ、寝るか」

何一つ変化をもたらさない停滞する闇。

その中で停滞する声は、やがて宣言通り眠ろうと静かになり――

「――ああ？」

何かを感じ取った。

「――ははあ、コレはコレは………楽しそうなこととしてやがるなあ。イイねえ、イイねえ」

変化の及ばぬ空間にありながら、『外』の小さな変化を感じ取り、声の主はそこに喜色の色を混ぜる。

先ほどまでの気怠げな、諦観と退屈にまみれた声音はそこになく、あるのは昂揚と期待に彩られた悪辣な声音。

それが響いた瞬間、声の主の『存在』はがらりと一変した。

闇を塗りつぶす勢いの闇。暗黒の更なる深みに行く深淵の黒。

『彼』の体が、気配が、感情が。

闇の中で、より強大な闇を纏う存在として蠢いた。

「――なあ、俺も混ぜろよ」

まるで『呪い』のように響いたその言葉。

そう呟いて何時間、何日経っただろうか？

しかし、悠久と言っても過言ではない時をそこで過ごした『彼』にとってはその刹那の時間。

そうして、その時は来た。

その眩きが聞き届けられたように。
閉ざされた闇の空間に、場違いな一筋の光が射し込んだ。

世界に『深淵』が解き放たれた瞬間だった。

——闇の変動より時は遡ること三日間。

時は現代、場は日本。

そこに生きる一人の少年が、不可思議な現象に巻き込まれていた。

「な、何だよこれって……!？」

黒髪黒目の日本人然とした容姿ながら、あらゆる人間の目を引くような凛々しい顔立ちをした少年。

それなりの身長を有し、鍛えられた引き締まった体は、強さだけでなく美しさすら感じさせる。

彼の名は石路ツワブキ 昂矢コウヤ。

年齢は17。現在高校二年生の少年だった。

どこにでも居る、普通の高校生を自称する少年。

だが、彼はひどく狼狽していた。
何故なら、それまでの人生ではついぞ体験しなかったような事態に
今まさに巻き込まれていたからだ。

家へ帰ろうと学校を出てすぐ、歩道橋を渡った彼の目の前に、幾何
学的な紋様が突如として現れた。

『空中』に描かれるという異様なソレ。
更に言うならば、それがすさまじい速度で彼に迫ってきていた。

「ちよつ、待つ——」

少年——コウヤは為す統べなく、それに飲み込まれた。

そして、少年はこの世界から姿を消した。

sideコウヤ

「お待ちしておりました、よくぞ我等にお応え下さりました、勇者
殿」

「は——？勇者？」

訳の分からん模様に飲み込まれた次の瞬間。
俺の目の前にはアニメみたいな格好——魔法使いっぽい？——
をしたオッサンが立っていた。

しかもその口から飛び出したのは『勇者殿』なんていう時代錯誤な言葉。

格好と言い、言動と言い、この人はそういう遊びでもやっているのだろうか？

「どうかなされましたか？」

「えっ？ いや、えーと……………」

停止していた俺に声をかけるオッサン。

それにちよつとびっくりした俺は、目線を辺りに散らす。

そして気づいた。

見るからに豪華な内装。

オッサンの後ろに立ち並ぶ似たような格好の奴ら。

立ち並ぶ兵士みたいな格好の奴ら。

そして、玉座のようなもの——と、そこに座る王様みたいなオッサン……………あ、その隣にいる女の子可愛いな……………って！！

「どこだよ此処は！？」

少なくともさっきまで居た歩道橋とは似ても似つかないだろ！

思わず叫べば、魔法使い（仮）のオッサンが説明しだした。

「此処はメイガルテンと呼ばれる世界、ファージル王国でございます。異界の勇者殿。私めは宮廷の筆頭魔導師を勤めさせていただ

いております、ガインズと申します」

メイガルテン？ファージール？何言ってるの？

つか魔導師って、オッサンやっぱり魔法使いだったのか。

オッサンは更に言葉を続ける。

「此度は被害を増す魔王の脅威に対して、勇者召還の儀が執り行われたのでございます。魔王を討ち滅ぼすことのできる英雄を。そして、貴男様は我等の呼びかけにお応え下さったのです」

——何か知らないが、これは、よくある『異世界召還』という奴だろうか？

魔王やら討ち滅ぼすやら物騒な単語が出てきたな。

アレ？マズいんじゃないか？俺が勇者ってことになってるなら……

「ガインズよ、話は付いたか」

「これは、陛下……！勇者殿は未だ此方のことをお知りではないようです」

玉座つばいここに座っていたオッサン。

陛下……つまりは王様か。その人が魔法使い（仮）もといガインズさんに話しかけている。

「よかるう、我が直々に話してやろう。勇者よ、こちらに」

「勇者殿、前へどうぞ」

ガインズさんに押され、王様の前に引き出された。

えっ！？いきなり謁見イベント？

まあ玉座の間で行われてる儀式っぽいし、手間を省いてんのかな？

「まずは聞こう、勇者よ、そちの名はなんと申す？」

「……昂矢、石路 昂矢です」

いきなり一国の王と対談とか、やめてほしい。

俺は平凡な高校生だぞ？

上流階級の作法なんか、わからないって！！

「ふむ、ツワブキ コウヤか……先代と似た響きだ。やはりそちは同じ世界より召還された勇者で間違いないな。では此方も名乗ろう、我が名はエドワース・フィル・バレス・ファージル。ファージル王国の王である」

王様は、いかめしく立派なお名前をお名乗りになった。

いや、その前な。

何やら先代とか同じ世界とか聞こえたぞ？

同じ境遇の人が居るのか？これは会った方がいいだろう。

「あの、先代と言うのは？」

「ふむ、千年前、先代魔王の脅威に際し、当時の王が召還させた勇

者のことだ。彼は見事魔王を討ち、世界を平和に導いたと伝わる」

千年？千年前？

はい死んでますね。

ちくしょう、のっけから躓いた気分だ。

この後、王様は今再び魔王が現れ悪事の限りを尽くしているとか、その被害がヤバいことになってきたとか、勇者こそが魔王を打ち果たせる唯一の存在だとか、そちに期待しておるだとか言ってきた。

「では、勇者コウヤよ！世界の命運はそちにかかっておる！頼んだぞ！」

おおっ！みたいな感じで王様が締め、謁見イベントは終わった。

俺ほとんど喋ってないよ。

すごい勢いで勇者として持ち上げれたよ。

気づいたら玉座の間から退出して、なんか客室に案内されていたよ。

「では、こちらでおくつろぎ下さい、勇者殿」

「あ、どうも……………」

案内をしてくれた侍女はぺこりと礼をして去っていき、部屋には一人、俺だけが残された。

「おいおいおい、展開早いよ。普通は『勇者よ、世界を救ってはくれんか？』『はい／＼いいえ』ぐらいあるだろ？」

部屋にあったふわふわのベッドに横たわりながら、俺はひとりごちる。

「なんなんだよ、もう……………」

急な展開に頭は着いていかず、その日は流されるままに眠りについていた。

俺がこの世界の現実を受け入れ、勇者として旅立つのを決意したのは、翌日のことだった。

そして、この世界で一番タチが悪くて、一番訳が分からなくて、あの意味一番厄介な存在に出会うまで、後三日……………

——深夜、玉座の間にて。

そこにはファージール王と一人の大臣が居た。

「陛下、やはりもう『あの牢』の術式は限界かと……………」

「ふむ、よりにもよってこの時期に厄介なものだ……………待て、そうだがこの時だからこそ……………」
『アレ』は、御せるのではないのか？」

「その業^{わざ}はあると聞きますが……………危険が過ぎるのでは？」

「多かれ少なかれ『奴』は何をどうしても危険だ。だからこそ、か

の大賢者はその秘術を残したのだろう。それを今使わない手はない」

「確かに……では勇者殿に『アレ』の手綱を握ってもらうので？」

「うむ、勇者には大賢者の血筋も供に付ける。それで『奴』は飼いきれぬだろう。魔王辺りとうまいことつぶし合ってくれば、それだけで我が国にとっての禍根は断たれるのだから」

「ではそのように手配いたします」

「うむ、抜かるなよ」

「御意……」

そして、一人の影——牢番を司る刑部の大臣が退出し、そこには王一人が残った。

王は、玉座に背を預け、召還されたばかりの勇者の顔を思い出す。

「勇者は手にした、大義は得た……これで『奴』を御しきることが叶えば……」

ニタリと歪んだその顔は、自国に、自身の元にもたらされる『力』を悦ぶ喜悦に染まっていた——

To Be Continued

序の話 異世界トリップ（後書き）

まだ主人公は出てきませんが

次も出ません

次次回出るはず

壱の話 勇者異世界を知る（前書き）

うちの勇者は無個性を目指してます。

見た目スペックは高いですが、内面は所謂普通。

モテすぎず、モテナさすぎず、
嫌われすぎず、好かれすぎず、
強すぎず、弱すぎず、

勝ちすぎず、負けすぎず、

チート過ぎず、主人公過ぎない、

まるでモテないギャルゲの主人公のような

そういう勇者を、私は書きたい

壱の話 勇者異世界を知る

「やあ、調子はどうだね」

「おお、アルか。そうさな、悪くないぜえ………な訳あねーだろ。アレだ、時間が有り余ってたんだ。もっと詰めて来いよお前」

それは何年前か。

いつの時代だったか、思い出せないほど昔。

暗闇に二人分の声が響いていた。

「そう言われてもね。私とて忙しい身だ。こうして来てるだけでも有り難く思ってくれ」

「ああ？お前が最初に泣きついて来たんだろうが。感謝しろはこっちの台詞だエロガキめ」

「ふーむ、その呼び名も懐かしいね」

「ちつ、昔はムキになって突っかかってきたのによ。可愛げが無くなっちまいやがった」

「まったく、いつの話だ。私が幾つになったと思ってるんだ」

「さあな、ここ暗すぎて体内時計とか関係ねーから。あと俺年とらねえし」

「ああ、そうだったなあ……いや、すっかり失念していたよ。ああ、時間とは凄まじく速いものだな」

声の一方が、懐古のような色を含んだものになる。
漂い出すしんみりとした空気。

しかし、もう一方はまったく気にも留めず、空気をぶち壊す。

「どうでもいいがよ、そろそろ出せよ」

「どうしても良くないよ。なんて淡泊な男か、君は」

「今更何言ってるのよお前。で、さっさと出せよ」

「そうだな。愚問だった。誰が出してやるものか」

「だろうな。言ってみただけだよ。あー、暇だ、退屈が人を殺すとはよく言ったもんだ」

「人を前にして何たる言いぐさ。なんて無体な男か、君は」

——今更何言ってるのよ、とうとうボケたか？

——ふむ、愚問だった。

会話はそこまで続き、ピタリと止まった。

淡々とした掛け合いすらもなくし、闇の中には静寂が広がる。

一人の声の主が、身じろいだ。

「——そろそろ時間だ。私は帰るとしよう」

「そうかい。さっさと帰りな」

「ああ、ではな」

あくまで淡々と、返される返事に熱はなく。

元より期待していなかった声の主は、くると、その身を闇の外へと向かわせた。

コツコツコツコツ。

足音だけが場に響く。

「アル」

と、背を向けた一人に、もう一方から声がかかる。

「珍しいね、君が引き留めるとは。これは変化と言えるのか？」

「知るかよ——なあアル。お前、そろそろ『終わる』だろ」

その言葉に、苦笑を隠せない『アル』。

「流石だな、流石は■ ■。やはり君には隠せないようだ」

「当たり前だろ、年期が違うんだよクソガキめ。俺を誰だと思ってやがる」

「そんな熱い台詞は、実に君に似合わないな」

「自覚はある。言ってみただけだ」

引き留めてまで告げられた言葉には、『アル』にとって予想していたとはいえ驚かざるを得なかった。

ただ、それでも相変わらざる相手の返し。

もう一方は、再び静かになりかけた場に、声を投じる。

「お前も『終わる』か。ああ、暇が増えやがる。何とかしてから帰れよ」

「してやりたいのは山々だが、どうやらそれを考える時間も無いんだよ。我慢してくれ。つまり、此处に来るのも、最後だよ」

「そうかい、そうかい。まあ、いいわ。ほれ、もう帰っていいぜ」

最後だと語るその口振りはただただ穏やかで、返す声すらも、ただただ『いつも通り』。

「君は本当に、最後まで淡泊な奴だったな」

コツコツコツコツ。

声の主は足を進めた。

ギリりと、闇の空間が軋めば、空間の一部が『外』へと繋がる。

声の主がそれに手を触れ、闇を後にしようとしたその刹那。

「あばよ、アルディレイタ——あばよ、悪友」

別れの言葉が一つ、後ろから投げかけられた。

『外』に半分身を乗り出したまま後ろを見れば。

その言葉を投げかけた本人は体中を封じられた不自由な状態のまま、
『彼』らしい笑みを——常と変わらない悪辣な笑みを、その顔に
張り付けていた。

『悪友』……成る程、『彼』と己を繋ぐに相応しい言葉だろう。
声の片割れ、『アル』——アルディレイタはそう思った。

そんな『彼』が、そして己の關係が、やけに可笑しく、やけに奇妙
で、やけに懐かしい——

前に向き直り、アルディレイタは微笑んだ。
決して二度と、後ろは振り返らずに。

「ああ、さようなら、——さようなら、親愛なる我が
悪友」

side コウヤ

「ん、ふあゝ……………」

朝起きたら何やら見慣れぬ豪勢な部屋だった。

「知らない天井だ……………いや、昨日見たよ。ああ、俺寝ちまったの
か……………」

俺は体を起こして辺りを見回す。

そつだ、ここは異世界のどっかの国の城だった。

「なんでこうなったんだ……………」

徐々にだが、頭がはつきりしてきた。

昨日聞いた話を整理しよう。

ここは異世界・メイガルテン。

その中にある国、ファージール王国。

そして俺は魔王を倒すために勇者として日本から呼び出された……………

「マジかよ……………」

なんてこった。

落ち着いて考えたら最悪じゃないか。

昨日はテンパリすぎて寝ちまったけど、頭がクリアになった今なら解る。

「帰れんのかな、俺」

そつ、問題はこれだ。

数ある創作物なんかでは、魔王を倒したら帰れるとかいう話が多い。

ならば、俺もそうしないと帰れないのか？

俺に、戦えるのか？

「……………ああもう！考えるのは性に合わないっての！！」

頭をガシガシと掻きながら、俺は立ち上がる。

情報が少ない、考えても堂々巡りだ。

「うん、誰かに聞こう！」

思い立ったが吉日とばかりに、俺はドアへと向かって歩き出す。

——が

コンコンコン。

ドアをノックする音と、

「勇者どの、お目覚めでしょうか」

という侍女さんのものと思われる声。

「ッッ！？は、はひ！どうぞ！」

いきなり止めてよ！？

ビックリするだろ！！

と、心中では叫ぶが、俺も男だ。

多少裏声だったが、冷静に返事を返した。

「失礼いたします」

すると、侍女さんが部屋の中へと入ってくる。
何か用だろうか？

「あの、何でしょう？」

「はい、朝食のお時間です。ご案内するように仰せっております」

「ああ、はいはい、朝飯ね……………」

言われて思い出す。

俺昨日の晩何も食べてなかったな。

どうりで腹が減るわけだ。

……………うん、丁度外に行こうとしてたし、タイムリーだ。
腹が減ってたら考えも纏まらないよな。

そう結論づけ、俺は侍女さんに付いていった。

考えるのは後だ！

まずは腹ごしらえが大事だ！

「ふう……………」

侍女さんに連れて行かれた先は、これまた豪奢な食堂。
なんと王様や王妃様、お姫様と同じ食卓だった。

マジで萎縮するから。

「どうした、未来を担う勇者殿だ！遠慮せず食べるがよい」

そう言つて満面の笑みで促す王様。
プレッシャーがスゴいですって。

まあそう言つなら、って結局はそこで食べたんだけどね。

常々にこやかだった王妃様と、お姫様——昨日ちらつと見た可愛い子だった——は日本でも見たことないぐらいの可愛さだったから、眼福だったけど。

アレ？そう言えば、勇者と姫のラブロマンスなんて、王道じゃね？

これは、俺にも春が来るんじゃないの？

……イカンイカン、思考が逸れたか。

と、そこで王様が口を開いた。

「勇者よ、これよりそちに魔王を討つための装備を与えよう。見事剣に選ばれ、そこで初めてそちは聖霊の遣わした英雄と認められるだろう」

で、何とかつつがなく朝食を終えた俺だったが、次は何やら勇者としての装備を調えるらしい。

聖霊やら剣に選ばれるやら、またもや聞き捨てならん単語が……

「これからですか？あの、少し解らないことが多いので、教えていただけるかと有り難いんですが……」

「そうか、そちはそういえばこの世界には明るくなかったな。よからう、装備を調えた後に場を設けよう。その時に聞くがいい」

「あ、そうですか。ありがとうございます」

「——陛下、少しお待ちを。数刻後には『神殿』より巫女殿が参られることになっております」

と、執事っぽい人が王様へ伝えていた。

王様は、すっかり忘れていたとばかりに「おお、そうであったな」と言えば、何故か渋い顔になる。

何だ？巫女さん嫌いなのか？

「聞いておつたとおりだ、勇者よ。装備は後にしよう。巫女殿が立ち会いとなつての選定でないと『神殿』も満足せんだろうからな……」

……」

「はあ」

「うむ、そうだな。では先にそちの願いを叶えよう。巫女殿が来るまでに知識を蓄えるとよい。ハンク、勇者を案内してやれ。おお、丁度よい機会だ、賢者を呼ぶとよからう」

「はっ、かしこまりました。では勇者殿、こちらへどうぞ」

そんなこんなで俺は執事さんに案内され、食堂を後にしたのだった。

しかし、今考えると随分よく喋る王様だったな。

普通は部下とか大臣とか、はたまた姫様の役割じゃないか？

「此方です、勇者殿。巫女殿、賢者殿兩名はいずれ参られるでしょう。しばしお待ち下さい」

「あ、どうも」

執事さんに連れられ（何か連れられてはっかだな、俺。しょうがないよな、城の中なんて解らないんだもの）着いたところは、玉座の間より少し手狭な、しかし十分に広い客間に通された。

取り敢えずソファーに腰をかける。

うん、やっぱりフカフカだ。

「ふいー、さあて、何から聞こうかな……」

王様の話では俺に色々と教えてくれるのは賢者さんらしい。

執事さん曰く俺と年も近いらしいのに、賢者と呼ばれてるとかすごいな。

流石は異世界か。

コンコン。

「失礼します」

と、鈴を転がすような可愛らしい声が聞こえてきた。

誰だ？

「はいどうぞー」

入ってきたのは、身長160センチほどの小柄な人物。肩口で一纏めにされ、背中で弾む蒼い髪が綺麗な、美少女だった。きりつとした顔立ちは、真面目そうな印象を受けるが、女性特有の丸さが険のない雰囲気を生み出している。

しばし停止した俺だったが、髪と同じ色をした瞳がまっすぐに俺を見ていることに気づいた。

「あ、えと、君は？」

何この子可愛すぎるだろ？思わず凝視しちゃったよ。

「お初にお目にかかります。私は、賢者の称号を名乗らせていただいております、フィオレ・ヘインストールと申します」

——って！！賢者女の子かよ！？

「勇者殿？」

「あ、ごめん。えっと、俺は石落昂矢、こっち風に言うなら、コウヤ・ツワブキかな？」

「ツワブキ殿ですか。私のことは好きにお呼び下さい」

賢者ちゃん——フィオレは神妙にうなずき、そんなことをのたま

う。

うーん、堅い子だな。

「ほら、もう少しだけ感じた感じでいいよ？俺もその方が楽だし」

「え？そう、ですか？」

「ああ、俺はフィオレって呼ぶから、君はコウヤって呼んでくれると嬉しいな」

「……ではコウヤ殿と」

うーん、まだ堅いけど、まあ、こんなもんかな。

「うん、それでいいよ。じゃあ、早速だけど色々聞いていいかな？」

「あ、はい、どうぞ」

さあ、ここからが本番だ。

「じゃあ、まずさ。俺は勇者ってことになってるじゃないか。で、魔王を倒すのが使命だと」

「はい、そうですね。コウヤ殿は二代目の勇者として呼ばれたのです。神殿の巫女殿の強い薦めで、宮廷魔術導師筆頭のガインズ殿が召還の儀を行われました」

なるほど、此処までいい。

しかし、また神殿と巫女殿ってのが出てきたな……

「まあ、それについては後にして。率直に聞くよ。俺は、帰れるのか？」

俺がそう問えば、フィオレは少し考え込み、うつむく。
悪い予感しかないな…………

「私の知識が浅いだけかもしれませんが…………私の知る限り、逆召還、送致の魔法は聞いたことがあります。先代の勇者殿も、当時の姫と結ばれこの世界で生き続けたはずです」

「そう、か…………」

それを聞いた俺は、思わず目を覆って天井を仰いだ。

予測はしてた部分はある、けど。

まさか、ホントに帰れないなんて…………

昨日から続く一連の事態。それらに流されるままにこの事実を突きつけられ、正直ちよつと参った。

「コウヤ殿、大丈夫ですか…………？」

「ああ、大丈夫、大丈夫だ。ごめん、ありがとうな、フィオレ」

「いえ、私の見識が狭いばかりに…………いきなり知らない土地に來られたんなら、当然不安ですよ。氣遣いが足りないで、すいませんでした」

いきなり押し黙っちゃったからか、心配そうに声をかけてくれるフィオレ。

その上自分が悪いとまで言ってる。

見るからにしょんぼりした彼女は、小動物的な可愛さがあるな。

ああ、この子は責任感の強い優しい子なんだな。

そんな彼女の様子に少しいやされ、俺はフィオレを励ます——立場が入れ替わってるけど、励ますために笑いかけてやる。

「いや、フィオレが悪いんじゃないよ。うん、もう大丈夫。続けよう」

「はい、もしかしたら、私が知らないだけで、そういう魔法が有るかもしれません。失われし魔法などには、そういった人知を越えたものがあつたとも聞きます」

「失われし魔法？」

そういえばさつきから魔法と言ってたな。

魔導師が居るぐらいだし、不思議じゃないか。

お、なんか興味が出てきたぞ？

うん！前向きになろう！

フィオレに色々と教えてもらって、当面は勇者としてがんばろう！！

考え込み過ぎるのは俺に似合わない、さつき自分で言っただけじゃないか！！

「詳しく教えてくれないか？」

「はい、そもそも魔法とは――」

そんなこんなで、フィオレからは色んなことを教えてもらった。

魔法のこと、国のこと、

魔物のこと、宗教のこと、軽くではあるが、様々なことを知ることができた。

確かに賢者と呼ばれるだけあり、彼女は博識だった。

「――へえ、なるほどな……そう言えば、魔王って言うからには、魔法使うんだよな？」

「いえ、魔王、ひいては魔族というのは、魔法は使わないんです」

おや？それは気になるな。魔族＝魔法っていうイメージなんだが。

その疑問に対し、話している内にやや丸い話し方になったフィオレは、一つうなずいて答えた。

「そもそも、魔法というのは人間が聖霊の力を借り、自然に語りかける業わざを指します」

フィオレが言うには、魔法とは人の内に眠る『魔力』を以て聖霊――この世界で言う神様みたいなもの。ここらへんはまた後で話すでしょう――の力を一部借り受ける。

それを以て火や水、光や風みたいな属性のある、俺が居た世界で一般的な認識での『魔法』ってものを使えるようになるらしい。

RPGの魔法は大概がこれに入るみたいだな。

ファイヤーボールとか、アイスランスとか、そんな感じか。

「概ねその認識で合っていると思います。また勇者召還の儀は、失われし古代魔法の一部が残されたモノなんです。だから、恥ずかしながら私たちにもまだ解明されていないことが多いんです」

フィオレは説明を続ける。

「魔法というのは内の小力を用い外の大力を動かす、人の編み出した技術です。それに対して魔族や一部の魔物達が使うのは、呪術と呼ばれるモノです」

「呪術……文字通り呪い殺したり？」

「そうですね。そう言ったモノもありますが、最も特筆すべきなのは呪術は個の存在のみで行使されるモノなんです」

魔法は使用に際し魔力の消費がある。

上位魔導師はそれをうまく使うため、燃費がいいらしい。

逆に、燃費が悪ければ、小さな魔法だけで魔力がスカラカンになってしまつとか。

そして、呪術。

これは、聞いた限りでは人間は使いこなせないらしい。なんでも魔法と違って、発動に他者の力を借りない、つまり自分が持ちうるエネルギーのみを使うらしい。また魔力とは違い、『心力』といった、所謂精神的なエネルギーを使うという。だから、寿命が長く、人よりも強大な精神力を有する魔族なんかには持つて来いな

技術だとか。

特に制限はないのから人間でも習得はできるらしい。ただ、それに莫大な意志の力と地獄のような状況でも折れない精神力が必要とか。

それでもやっと、使えるのは初歩レベルの呪術程度だという。

だからこそ人は呪術ではなく、魔法を発展させてきたらしい。

まあ、割に合わなすぎるよな。

なんだよ地獄のような状況でも折れない精神力って。そんな奴いるのか？

「へえ、しかし、呪術ってのはそこまでしないと使えないんだろ？強いのか？」

「……正直言つて、呪術というのは何でもありません」

「え？それって反則臭くないか？」

「意志の力を根元とし、他者や自己、世界に新たな事象を巻き起こす技ですから。明確なイメージと強靱無比な意志の力さえあれば、理論上は何でもできるらしいんです」

フィオレも思うところがあるのだろう、少し眉をしかめた顔でそう言った。

俺はその言葉に呆れるしかなかった。

「何だそりゃ……反則じゃないか」

「その上魔王と言うのは、魔族でも群を抜いた強者——文字通り魔族の王です。彼は当代最強レベルの呪術使いと言っても過言ではないと思います」

なっ！？

当代最強！？

そんな力を持つ魔王と戦うのか？

俺が？

勝てるのかよ………すげー不安になってきた。

魔法なんかよりよっぽど魔法じゃないか。

話題が話題だけに場の空気が重くなり、辺りがシンとする。

そして、俺はふと思った。

「……………そうだ、なあフィオレ」

「はい？」

「先代つてのは、そんな魔王に勝ったんだよな」

「はい、そうですね」

俺と同じように召還され、勇者と呼ばれた先輩は、そんな化け物に勝っちゃったらしい。

凄いな。

そんな奴に一人で挑むなんて……

「先代勇者には、彼と共に魔王に立ち向かった四人の盟友が居たんです」

「えっ？」

フィオレは今なんと言った？

『共に戦った』……… そうだ、盟友が居たと言った。

つまりは、仲間がいたんだ。

一人で戦った訳じゃないんだ――

俺は、気づかない内に重圧が掛かっていたようで、堅く握り込んでいた拳をゆるめた。

「仲間が、居たんだな」

「はい、当時の魔王は強大だったといえます。召還された勇者だけに任せるわけにはいかないと、国一番の者達を従者として共に旅立たせたそうです」

なんかいつきに英雄譚みたいになってきた。

俺にも従者――仲間ができるんだろうか？

「これはおとぎ話のように民草にも広まっている語りなんですが、お聞きになりますか？」

フィオレが言うには、先代勇者の偉業を讃えた、まさしく英雄譚があるらしい。

「うん、是非聞かせてくれ」

「それでは――」

フィオレは目を閉じ、その小さな手を膝の上に置いて佇まいを直し

――詠うように語り出した。

――かつて、世界は滅びに満ちていた。

五つの大国には悲劇があふれ、世界には魔王の魔の手が牙をむいた。

聖霊様は嘆き悲しみ、人々は泣き、叫び、絶望に晒された。

そんなとき、ファージールに一人の勇者が現れた。

彼の者の名をカイチロウ。

闇夜のような黒い髪眼に、朝日のような白き聖剣を携えて。

彼は魔王に立ち向かった。

従者^{とも}には四人の英雄達。

竜をも斬り伏す大剣士。

全てを護りし聖騎士。

聖霊様に仕える姫巫女。

そして、勇者の背中を、最も深く支えしもう一人。

魔導を統べる大賢者。

彼ら五人は世界を渡り、

世界を巡り、

世界を護り、

やがて、魔王を討ち果たす。

聖霊様は微笑まれ、人々には笑顔が戻った。

ファージールに戻った勇者は、彼を待ち続けた姫君と結ばれ、生涯を姫と共に過ごした。

彼の偉業は世界を救い。

彼の名は世界に伝わる。

その勇者の名はカイチロウ。

『朝焼けの勇者』カイチロウ・アザラク――

詠い終え、蒼い目を開いたフィオレを見ながら、俺は解ったことがある。

「カイチロウって……完全に日本人だろ」

「はい？どこか気になりましたか？」

「いや、別に……」

話自体はよくある英雄譚。珍しくも何ともない、が、実話なのだという。

いや、一番気になったのは、中に出てくる名前だよ。

『カイチロウ・アザラク』

漢字にするなら字楽 嘉一郎、かな？

珍しいから逆に間違える余地がない。

モロに御同郷だ。

時間軸がどうなってるかはしらないけれど、今の物語の中に日本人の名前が紛れ込んでるのって、すげー違和感あるなあ。

まあ、いい話が聞けた。

フィオレの甘く透き通った声がよかったのもあるな。

「フィオレ、話聞かせるの巧いな。教師に向いてるんじゃないか？」

「へ？え、いや、えと、そういつていただけると、嬉しいです」

照れくさそうに頬を赤く染めるフィオレ。

やっぱり、可愛いなあ……

「あのっ！コウヤ殿！」

「…………ん？何？」

おっと、じつと見過ぎたみたいだ。

自重しろ、俺。

「コウヤ殿にも、従者として四人、少なくとも三人は供が付けられるはずです。貴男は一人じゃありません」

……………おお、何という。

このタイミングでその言葉は染み入るなあ。

俺は再び、いや三度、フィオレの優しさを知った。

「うん、ありがとな……………」

俺は思わず、フィオレの頭を撫でてしまった。
何となく、そうしたかったんだが……

「へああ!？」

パシン、と、払われてしまった。

……そうか、そうだな。

いきなり頭なでるとか失礼すぎるだろ、俺。

ギャルゲじゃあるまいし、何考えてんだ。

死んじゃえよ、俺。

「あつ、あの、ごめんなさい……その、あまり、慣れてなくて……

……」

泣きそうな顔で謝罪してくるフィオレ。

ごめんな、罪悪感が倍プツシュだ。

悪いのは俺だ、全部俺だから……

「うん、ごめんな、いきなり。俺の方こそ悪かったよ」

「いえ、別に、大丈夫ですから……」

あまり気安く彼女には触れない方がいいな。

これ以上失望されるようなことしたら、流石に心が痛すぎる。

俺の行為のせいで、またしても変な空気になってしまった。
よし、話を変えよう。

「なあ、さっきの話なんだけどな」

「はい、何でしょう？」

フィオレもその方針に賛成らしく、気に留めないように話を返してくる。

うん、有り難い。

「聖剣って今もあるのかな？」

「はい、先代勇者が帰還した際に聖霊の加護と英雄の偉業を祀り、聖具として宝物庫に保管されているはずです」

「それは、使えるのかな？」

それが気になった。

魔王を倒した勇者が振るった聖剣だ。

こういうのは相場として強力だと決まっている。

使えるならば、是非使いたい。

そう思っただけで、フィオレはこくりとうなずく。

「コウヤ殿であれば、勇者として剣に選ばれるでしょう。聖霊の加護が付与された聖具です。真の使い手と認められれば、心強い相棒となってくれると思いますよ」

なるほどな、王様が言っていたのはその剣のことか。うん、俺も男

の子だ。

そういう話に食指が動かない訳がない。

俄然やる気がわいてきたぞ！

「聖剣はあらゆる『悪』を断つ斬魔の聖具。かの魔王の呪術すら、断ち切ったと聞きます。対魔王の武器として、これ以上の物は同じような聖具にも、そうそうないと思います」

「呪術を斬ったって……すげーなあ」

「英雄譚にはありませんが、勇者達は魔王とその『親友』を相手に、魔王城で決戦を繰り広げたのです。そこに至るまで、聖剣は全ての敵を切り払ったと言われてますから」

半端じゃないな聖剣………ん？今何か、新しいことを聞いたような

……

そうだ、魔王とその『親友』。

初めて聞いた言い回しだ。

「なあフィオレ。魔王の親友って——」

俺がフィオレに問いかけたその矢先——

「勇者様はこちらにいらっしゃいますの——！！？」
ドカーーン、と。

扉が爆発したかのように開け放たれた——

T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

.....

壱の話 勇者異世界を知る（後書き）

主人公出すのは次のつもりでしたが、無理っぽい

あとこんな感じの話が二話続きます

その後ぐらいに、たぶん出るかと

式の話 聖剣ゲットだぜ（前書き）

可笑しいな

話が纏まらないぞ？

主人公が出てくる気配がない

式の話 聖剣ゲットだぜ

ガチャリと。

闇に鍵音が響く。

数年、十数年ぶりの異音。『彼』は何事かと、眼前に現れた人物を見て嘲笑をこぼす。

「——あ？ああ？おいおい人間殿。なんだ、テメエ何しに来たんだ、こんな奈落の底までよ」

「……………君に、聞きたいことがあるんだ」

「んだよ、尋問はとつくの昔に終わつたろうよ？」

「違う。違う。これは、その……………個人的な『質問』だ」

返す声は若々しく理知的な、しかしそれでいてどこか苦渋を含んだようなものだった。

「質問だと……………テメエが？俺に？テメエみたいな『お偉いさん』が、『この俺』みたいな存在に？……………クツ、ハハハハッ！」

「クソッ、笑うな！！私だって恥を忍んできているんだ！！」

「クククヒハハ、ハッ、ハア……………あー、笑った。いや、いいぜえ、答えてやるよ。何でも言ってみなあ」

「……………なんだ、やけに素直じゃないか」

「ああ、俺はいい奴だからな。すげーいい奴な俺は、テメエの下らん疑問にも隅々までお答えしようってんだよ」

「世紀の悪党がどの口で言う気だ……………くっ、こんな奴を生かしておくしかできないなんて……………ッ！」

「俺をこんな場所に縛り付けやがった張本人様がどの口で抜かしやがる。まあ、気にすんなって。暇で暇で仕方ねーんだ。こんなことでもよ、暇潰しにやあもってこいつてぐらいにはな」

「……………まあ、いいさ。では、聞きたい。教えてくれ■■。呪術とは——」

そこで、若い声と『彼』の声は、霞がかったように歪んでいった。聞き取れるのは語り合う両者のみ。

闇に潜むように、闇に溶け込むように、音は散り散りとなっていた。

「——」

「——？」

「——」

「……………」

若い声の主が、踵を返す。足早に立ち去ろうとする彼に、『彼』はニヤリと言葉を投げつける。

「満足したかあ、 ■ ■ ■ 殿？」

「——君を、信じたくはない。が、君を信じるしか今の私には道がない……………だから」

振り返ることもなく漏らされたその声音には、怒りと、無情さと、焦燥と——

「『信用』するぞ、 ■ ■ ■」

希望が、含まれていた。

そして、彼は闇を出た。

ガチャンと響く施錠音。

本来ならばこんなに軽い音ではないはずだ。

しかし術者たる若い声の主が、そんな手抜きをするわけもなく。

闇は、今までと同じように、閉ざされていた。

残された『彼』は一人、誰にともなく、虚空に向かって語りかける。

「——ああ、ああ、『信頼』してくれ。俺はそっちに関しちやあ、無敵だぜ？ なんとたつて俺は—— ■ ■ ■ だからな」

『彼』らしい力の籠もらぬその言葉は、若い声の主には届きはしない。

しかし、彼は関係ないとばかりに、独り言を吐き続ける。

「俺あ暇なんだ。暇で暇で、暇すぎて。寝るか、『練る』かするし

かねえ」

そして『彼』は『願い』か、『呪い』か。
はたまた純粹な要望なのか。
闇に向かって呟いた。

「だから来やがれ、アルディレイタ。当面はテメエで満足してやるよ」

それは当然。答える声は、そこには無く――

sideコウヤ

「勇者様！貴男が勇者様ですね！？ああ、お会いしとつございました！わたくし、ずっと待っております！待ちわびておりました！」

「えっ、あ、あの、君は？」

なんだなんだなんだ！？

ドアがぶち破られたと思ったら、なんかまた別の女の子が！？

そして凄いことを言いイながら飛びついて来た――！？

俺の頭はあまりの唐突な事態にフリーズしちゃったよ。

「メルティアー様……………」

展開に取り残された仲間のフィオレが、ぽつりと呟いた。

メルティーアって言うのか、この子。

メルティーアとやらはフィオレの存在に今気づいたと言わんばかりに視線をそっちに向けると、その端正な眉をしかめた。

「あらフィオレさん。いらしたんですの？」

「はい、ずっと」

「相変わらず可愛げのないお方ですこと」

いやいやいや、フィオレは可愛いよメルティーアさん。

いや、そうじゃない。

そうじゃないだろ俺。

まずはちゃんと名前を聞かないとな。

「えっと、メルティーア、さん、でいいのかな？」

「はい！――！」

おう、すげー食いつきだな。

するとメルティーアさんは飛びついた際に乱れた服の裾を正し、俺から少し離れた。

ああ、びっくりした。

まあ、名乗るにしてもこっちからが礼儀かな？

「俺はコウヤ・ツワブキ。一応勇者ってことになってるみたいだけ
ど…………コウヤって呼んでくれると嬉しいよ」

「はい！！コウヤ様！！」

メルティーアはキラキラと目を輝かせてそう返してきた。

…………何というか、すごい目が輝いてるよ。何で？

「申し遅れましたわ。わたくし、『神殿』より参りました。聖霊巫
女のメルティーア・マイラ・リナ・ブルームと申しますの」

優雅にお辞儀をした彼女は、聖霊巫女だと名乗った。

確かに、着てる服は真っ白な所謂法衣って奴みたいだ。

薄いブロンドの髪を肩口までのツインテールにした彼女は、緑の瞳
も相まって聖職者と言うよりは、どこかのお嬢様みたいだ。

ていうかこっちに来てから見た女性のレベル高すぎるだろ。
何ここ、ここが楽園なのか？

「親しい者にはメル、と。そう呼ばれておりますの。あの、宜しけ
れば、コウヤ様もそう呼んでいただければ……………」

「いいの？」

「はいっ！勿論ですわ！」

「うん、じゃあそうするよ。宜しくな、メル」

「っ!!」

顔を赤らめたかと思いきやもじもじとするメルティーアだったが、愛称を呼んだ次の瞬間には花が咲いたような笑顔を見せた。

にぎやかな子だな。

「メルティーア様。もうよろしいですか？」

「……………あらフィオレさん。貴女はやっぱり空気を読めないんですね」

「すみません。性分なんです」

「フンッ」

先ほどの乙女ぶりが一瞬で霧散したよ、メル。フィオレに対しては冷たいなあ、嫌ってるのか？

「そつえば、メルはどうしてここに？」

俺がそう聞けば、彼女はパンツと手をたたいてうなずいた。

「そうでした！わたくしはコウヤ様と共に聖剣の選定に向かいますの！お待たせして申し訳ありませんでしたわ！さあ、早速宝物庫へ行きましょー!!」

「ああ、そう言えばそんなこと言ってたなあ。よし、解った。行こうか」

俺の手を取るメルに承諾してやれば、彼女はやっぱり満面の笑みである。

すると、フィオレが切り出す。

「では、私はここで失礼します」

「え？フィオレは一緒に来ないのか？」

「はい、私には少し所用がありますから」

「いいではありませんか、コウヤ様。フィオレさんなんて放っておいても！」

「ハハ、そう言うなって……………」

なんだ、フィオレは来ないのか。

すっかり一緒に来るもんだと思ってたからな。

まあ、メルも何故か頬を膨らましてるし、あんまり食い下がらない方がいいよな。

「わかった。色々ありがとうな、フィオレ。また話聞かせてくれよ。いいかな？」

「はい、勿論です。コウヤ殿も選定、頑張って下さいね。では、失礼します」

ぺこりと頭を下げ、髪を揺らしながら、フィオレは部屋を出ていった。

「じゃ、俺たちも行こうか」

「はい!!」

この時、メル of 襲来で俺はすっかり忘れていたんだ。

メルが来る直前、俺がフィオレに何を聞こうとしていたのかを……

「へえ、メルんちって凄いんだなあ」

「そうですの! 何と言ったって、わたくしの直系の祖はかの大僧正、スロファ・ブルームですよ!」

俺は宝物庫に向かう途中、メルからいろんな話を聞かせてもらっていた。

俺が聞いたら快く答えてくれる。

うん、フィオレには冷たい気がしたけど、やっぱりいい子じゃないか。

彼女から聞いたのは主に聖霊、神殿についての話。

ここでそれをちょっと纏めてみよう。

この世界、メイガルテンには宗教というのが一つだけらしい。

その名も『聖霊教』。

聖霊アスマットを主神として、数々の神霊がいる多神教。

主神が聖霊なのは大陸共通——といっても大陸にある国は五力国だけらしい——だが、副神となる信仰の対象が国によって異なるらしい。

例えばここ、ファージール王国では、賢智の女神・智霊フレイヤを信仰しているとか。

そうそう、神殿というのは聖霊教におけるある種の本部らしい。五力国に一つずつ、計五力所あって、メルはファージールの神殿で巫女として聖霊に仕えているんだって。

キリスト教でいう五本山みたいなものかな？

宗教にはあまり詳しくないから解らないけど、メルの話しぶりでは、彼女の家系は相当な位の高い血筋らしい。

「その大僧正って人は、どんなことしたんだ？」

「ご先祖様は、千年前の先代勇者様の時代に神殿長を努めておられたのです。そして、先代勇者様に聖霊様のご加護を託されたという世界の平和を守った英雄の一人なのです！王家の血にも劣らない偉大な聖人でしたのよ！」

「聖霊のご加護……」

聖霊に加護を受けると、聖なる力により洗礼者は超人的な力を得る

らしい。

聖剣が凄かっただけじゃなくて、本人も戦えたんだな、カイチロウさんとやらは。

そりゃあ、武器に頼ってばっかじゃ生きてけないのか……いや、聖剣にも聖霊の加護があるんだっけ？

やっぱ神様ってのは最強なんだな。

「聖人って？」

「人でありながら、聖霊様の御力をその身に宿した聖なる者のことです。加護を受けた者は、そう呼ばれますわ。先代勇者様一行は勿論、ご先祖様もそうだったと言われております」

聖人ってそういう意味か。キリスト教みたいに、教会に認められて列される云々じゃないんだな。

「確かにそういった本山からの認定も多いですわ。しかし、真の意味での聖人は、やはりご加護を受けている者を指すんですの」

あ、そう言う制度もあるにはあるのか。

しかし、神様が身近だと完全な実力主義になるんだな。

「つまり、メルは真の聖人、英雄の血を引いてるってことか。カッコいいなあ、そういうの」

「そ、そうですか？あ、ありがとうございますわ！そう言っていただけと、ご先祖様もお喜びになるでしょう！！もちろん、わたく

しも……………！」

照れる仕草も可愛らしい。法衣をはためかせながら、女の子らしくもじもじとする姿は、イイな、うん。

つと、煩惱退散煩惱退散！

そこでふと気になった。

そう言えば、先代勇者は姫様と結婚したんだっけ？

「なあ、メル。先代勇者が当時のこの国の姫様と結婚したんならさ、この国の王族は勇者の血を引いてるってことか？」

「……そうですわね。ファージール王家は、勇者の血の正統ですの。そうすることで神聖さの強調をはかったとも言われております」

話題が変わるとなんかメルの機嫌が傾いてきたな。

まあ、ちゃんと聞いたことは教えてくれるからいいんだけど。

しかし、王家の話はなんか政略っぽくなってきた。　そういうのは苦手なんだよ。

すると、メルが真剣な顔でこちらを見てきた。

少し声を潜め、俺の耳元で小声に告げる。

「コウヤ様。もしかすると此度の勇者召還でも、王家はその血を王家に加えようと画策するかもしれません」

「えっ？それって……」

俺が、あの姫様と結婚させられるかもしれないってことか？

あの、美少女と……いいじゃないか

「って、無い無い。そんなことあり得ないって。だって俺、何の取り柄もないぜ？それに俺と姫様じゃあ釣り合わないし……」

俺が否定すれば、メルはどこか複雑そうな顔でため息をついた。

「……そう言われるならば、大丈夫ですわね。しかし、お気には留め置き下さいませ。決して、ご注意を怠らないで」

「ん、わかったよ」

心配してくれてるのかな。やっぱりいい子だよホント。

「……あの女にコウヤ様は渡しませんわ……わたくしが、わたくしの勇者様ですもの……」

「ん？どうした？」

メルが何か呟いたが、聞き取れなかった。

俺が訪ねれば、彼女は慌てて手を振る。

「な、なんでもありませんわー!!」

「そう？」

「ふあいー!!」

何故かテンパって噤んじやったメル。

恥ずかしらしく顔が耳まで真っ赤だ。

もう、一々可愛いなあ

「へっ！？あの、コウヤ様？」

つと、俺は無意識のうちにまたしてもやらかしちまったみたいだ。
気づいたらメルを撫でていた！

「あつ！ごめん！」

やっちまった！と手を引こうとすれば、その手をメルが引き止める。

何で？

「えと、あの……わたくしは、嫌ではありませんわ。わたくしの頭
でよければ、どうぞ………」

節目がちにそう言うメル。フィオレとは凄まじい反応の違いだ。

何がよくて何が悪いのか、解らなくなってくるな。

あたりに甘酸っぱい空気が流れ出したあたりで（手はまだメルの上だ）、メルが声を上げた。

「……あ！コウヤ様！そろそろ宝物庫ですわ！わたくしも聖霊巫女
としてしっかりと立ち会わせていただきます。ご安心なさって下
さい！」

おお、着いたのか。

白の真ん中にある宝物庫は、やっぱり嚴重そうな扉だった。

この中に、聖剣があるんだな……

「よっし！」

気合いを入れて、俺は宝物庫へと入っていった。

「これが、聖剣……」

俺は、宝物庫の最奥、一つ高くなった祭壇のような場所にいた。

目の前には、白刃から神々しい光を放つ、両刃の大剣。

豪華な装飾でありながら、武器としての雄々しさが全く失われていない。

たしかに、これは聖剣と呼ぶ以外に呼び名が見つからないな。

「これが、先代勇者の振るいし『斬魔』の聖具、聖剣・ジールグラム」

先ほどまでと違い、巫女として澁刺として声で名を告げるメル。

うん、緊張してきたな。

メルは続けて、俺に語りかけてくる。

「では勇者コウヤ・ツワブキ様。聖剣をその手に」

「ああ」

一歩二歩、踏み出す。

台座に固定されたそれは、聖霊の力により選ばれた者以外には抜けないようになっていいるらしい。

剣から放出される迫力が、まるで質量を得たみたいに、俺の体を重くさせる。

俺に本当に抜けるのか……………

不安を押し殺し、俺は聖剣の柄に手を掛け――

ガコン。

「あれ？抜けた」

「おめでとうございます。聖剣は貴男を選びました。ここに、聖霊様の名の下に、貴男は勇者と認められました。

勇者コウヤ様に聖霊のご加護があらんことを――――流石です！

コウヤ様！わたくしは信じておりましたわー！！」

え？メルはものすごい喜んでくれるけど……………

え？こんなあつさり？

抜いただけだよ？

しかも一発かよ。

「なあ、こんな簡単なもんなの？」

手に持った剣を見下ろせば、先ほどまでの迫力は何だったんだと言いたくなるぐらい、普通の剣だった。

いや、それでも普通よりかはすごい見た目なんだけど…………

なんか、物足りないな。

「それだけコウヤ様が聖剣にふさわしいということですね！まさしく、貴男様はわたくしの勇者様です！！」

「あ、ああ、ありがとう……」

普通はさ、剣の聖霊と語らうとか、先代の遺志を屈服させるとか、イベントがあるんじゃないだろうか？

肩すかしを食らった俺は、なんか釈然としないまま聖剣の勇者となつてしまったのだった…………

マジで、いいのか？

——コウヤが剣を抜いたその日の夜。
場所はファージール王城の練兵場、騎士の詰め所。

篝火が焚かれるその場所に、二人の男が居た。

そのうちの一人、若い騎士が、上官へと異議を唱えていた。

「私は反対です！勇者殿は、明らかに戦いを知らない」

「そう言うな、私とて納得はいかん。しかし、これも王命だ。反駁は許されん」

彼らは、コウヤが召還されたまさにその時。

王座の間にて立ち並んでいた騎士達だった。

精鋭揃いの若き騎士達は、召還された勇者をその目で見ていたのだ。

彼らには、精鋭たる誇りと、実力があつた。

だからこそその中の一人、彼は言わねばならなかった。

『勇者は勇者足り得るのか』と。

「……先代をなぞらえるつもりですか」

「どうやら、そのようだ。従って、先ほども言ったとおり勇者殿へ付ける騎士は一人のみとなる」

「くっ……副長殿はそれでよろしいのですか！？魔王と戦うことすら許されないなど！我らは何の為に剣を、槍を、この腕を磨き続けてきたのか！！」

「……………」

「副長!!」

押し黙る上官に、若い騎士はさらに詰め寄る。

しかし、副長と呼ばれた、こちらはまだ若き騎士は、手をかざし、部下を制した。

「——私が、確かめよう」

「では……!!」

「王に許可は取ってある。隊長にもな。私手ずから相手をし、勇者殿の腕前、確かめさせていただく………これでいいだろう?」

「はっ!!」

若き騎士は尊敬する上官の言葉に、背筋を正し敬礼する。

そこにあるのは、無上の信頼。

彼の上官は国内五指に入る実力者。

その強さは、部下である自身がよく知っていた。

彼が動くならば、己の懸念も晴れるだろう、と。

「さあ、明日も早い。早く隊舎に帰るといい」

「はっ!失礼します!」

若い騎士は敬礼し、詰め所を後にした。

パチパチと篝火が爆ぜる以外の音が消えた空間にて、副長と呼ばれ

た騎士は、一人、佇む。

「——明日は、その力見定めさせていただきます、勇者殿。このヴァロン・ライナーが剣に賭けて……………」

ファージール王国が最精鋭、近衛騎士隊副隊長。

ヴァロン・ライナーは、静かに、宣言した——

——そして、また所は変わる。
城内のとある執務室。

部屋の主である刑部大臣・モルガンは顎髭を一撫でし、デスクの脇に目をやる。

そこに立っていた瘦身の青年——その格好は魔導師のそれ——は、その視線を受け、口を開いた。

「首尾は整っております。決行は明後日。『彼女』からも承諾を頂きました」

「そうか……………筆頭魔導師殿には漏れておらんだろうな？」

モルガンの問いに、青年は口端を歪める。
しかし平坦な声音のままに。

「勿論。ガインズ卿はおるか、この事を知るのは、魔導師では私以

下数名のみ……奴らに漏れることはありません」

満足のいく答えに、モルガンは応用に頷いた。

「ご苦労。フフフ、口五月蠅い奴らのことだ。いかに陛下の命とは言え、事前に知られれば奴らが喧しく吠え立てるのは必定……」

「『神殿』は聖霊の遣わしたという勇者殿に夢中の様子。これほどの好機はございませんね」

「ああ、これで、『神殿』の小蠅どもも王宮で大口は叩けんようになる……精々勇者殿には眼くらましになってもらうでしょう——
——だが、本当に巧く行くのだな？」

喜びの笑みを浮かべていたモルガンは、青年に向き直るとその顔を引き締める。それに対する青年は、先と変わらぬ貼り付けたような無表情。

青年は念を押すように言った。

「『彼女』については、文献に示されていたとおりならばなんら問題はないかと。一つ問題を挙げるならば、彼女は少し堅物過ぎる嫌がある」

彼らの話していることは、決して綺麗事ばかりではない。

話中に上がる『彼女』の性格は、モルガンもよく知っていた。

土壇場で手のひらを返されては、彼はおろか、ファージールとして厄介なことになる。

モルガンは思考を巡らせる。

神の権威を笠に着て、国政に口を挟むあの『神殿』の神官どもに付

け入る隙を与えないためにも。

「ふむ。では、明日王への謁見を申し出よう。そこで王命を下せば、『彼女』とて覚悟を決めるだろう」

「そうですね、彼女は科された任は何かあっても優先して遵守するでしょう。それは、信頼できます」

「……さて、こんなものか。明後日が待ち遠しいな。これで、我等の力はますます強まる……陛下もお喜びになるだろう。ご苦労だったワレフ卿。最後まで気を抜かんようにな」

「はい、それでは私はこれにて——」

コウヤの預かり知らぬ所で、陰謀は加速する。

主人公が居なくとも、世界には闇と光が巡り続ける。

何故ならば、そこに生きる人々こそが、その世界の主人公なのだから——

To Be Continued ……

式の話 聖剣ゲットだぜ（後書き）

次話、で、布石

次次話で、登場？

もうわからない

参の話 廻る世界の前日談(前)(前書き)

長すぎた感があるので、前後編に

参の話 廻る世界の前日談(前)

「……………」

「どおしたよ。無言で突っ立ちやがって。何しに来たんだテメエ？」

常と変わらぬ闇の中。
相対する二つの陰。

しかし一方は押し黙り、苛立ち始めたもう一方は、少し声を荒げた。

「その、だな……………」

「告白三秒前の女みてえな面しやがって。俺との逢瀬を楽しみたい
ってか？」

「いや……………」

「あれだよ？男がやっても全然うれしくも何ともないぜ？むしろ気
色ワリイ。帰れ」

「くっ！人が黙っていればゴチャゴチャと！！私は君に告白しに来
たのではない！」

「逢瀬をつてのは否定しないときたか……………ははあ、テメエは男色
だったか。いや、初め見たときからそうじゃねえかと思ってたんだ。
相手は誰だ？あの洩垂れか？名実ともにあの洩垂れの女房役ってか
？ギャハハハハハ！！」

「気色の悪いことを抜かすなっ！！私は女性が好きだっ！！」

「大声でそんなこと喚くなよまったく。発情期かエロガキめ」

「っ！？こ、の……………」

一転、子供のようなやりとりを繰り広げる二つの影。それは、仲が良さそうな、本当に子供のように——どこか遠いやり取り。

そこで押し黙った片方を訝しみ、もう一方の影が胡乱な視線を投げかけると——

「——ありがとう」

「あ？」

そう、呟いた。

それは小さく、しかししっかりとした音の波は、相手の耳へと届いていた。

「いきなりこういう風の吹き回しだ？テメエが、俺に礼を言う？」

「ああ、君の知識のお陰で、私は大切な女性^{ひと}を失わずに済んだ」

始めのやり取りにあった軽さを感じさせず、声の主は神妙に言葉を発する。

それは、紛れもない『感謝』の情念。

「……………ああ、ああ、そうだ。そうだった。前のアレか。アレの

ことか」

「どれかは知らんが、多分それだろう。私は本当に、君に感謝している。ありがとう」

眼前の人間が、『彼』を打ち負かしここに閉じ込めた人間が。

『彼』に頭を下げ、礼を述べている。

それが妙に可笑しく、オカシく感じられ、『彼』は、表情を崩す。
ニヤニヤ、ニタニタ。

そういった悪辣な笑みへと。

「なんだテメエ。前のアレはそう言うことか。オイオイ、水臭えな。そんぐらいなら俺にかかりゃあ一発で解決だったぜ？」

「……そういうわけには行かないだろう」

「そうだ、感謝してるんだろ？なら、出せ。こつから」

「それとこれとは、話が別だ」

『彼』にかかれば、シリアスな空気も一瞬で喜劇と化す。

真面目な相手に不真面目を。

真摯な相手の揚げ足取りを。

それこそが、『彼』の生の楽しみ方。

「で、そんだけか？もつと感謝の念を述べてってもいいんだぜ？」

「ああ、これだけだ。君と話すのはひどく疲れる。それに大して有

益でもない。却下で願うする」

「そうかい。ああ、そうかい…………クソめ、また暇と暇と暇しかない生活か。流石に飽きが来るぜ?——いつそ殺せよ」

「それは…………できない。『殺し方』が、解らない」

「だろうな。前言撤回だ。誰がテメエみたいな男色野郎に殺されてやるかよ」

「ツツ……!!?まだ言うか!!」

「ヒヤハハハハハ!!」

「もういい!これ以上用はない!!」

怒りに顔を紅潮させた、今にも爆発せんばかりの人影は、ツンツンと足並み荒く、出口へ向かっていった。

それを見送る『彼』は、馬鹿笑いを止め、するりと言葉を発した。

「なあ、■■■■。テメエで作ったんだから解んだろ?ここに居てみるよ。暇で死ねるって意味、よく解るぜ?」

嘲りがなりを潜めたその声には、何が含まれていたのか。

それは誰にも解らない。

しかし、それを聞き取ったもう片方は——蒼髪の青年は、確かに足を止めた。彼が何を思ったのかは定かではない。

しかし、淡々と『独り言』を述べだした。

「——この『牢』は、私の管轄だ」

「あん？どしたよ藪から棒に？」

それはあくまで『独り言』故に、『彼』の声には答えない。

「私には、ここの術式を維持させる義務がある」

「……………」

「——だから、時々。極たまに。この牢まで来なければならない」

「……………クツ」

「ならば、ついでに囚人の様子をつかがうのも、私の仕事の一つなんだよ。解ったか■ ■ ■」

最後は語りかけるように、『独り言』は占められた。

「……ククツ、クツハハハハハッ！！ヒヒッ！！城勤めも大変だわなあ！ ■ ■ 様ともあるうてメエが牢番か！？いいね！いいねえ！精々仕事に励んでくれよ！！」

「君に言われずとも当然だろうが」

それだけを言い残し、彼は去っていった。

「クツクツ、素直じゃねえなあアルディレイタ。まあ、だからこそ、
退屈しねえ——」

『彼』は、久方ぶりの娯楽足り得るナニカを見つけ、上機嫌に嗤った。

暗闇に響くのは、その嗤い声——

sideコウヤ

突然だが、俺は今練兵場って所にいる。

何を言ってるかわからねーと思うが、俺だって（ry

いや、まあ紆余曲折………そうでもないが、それなりに色々あったんだ。

「勇者殿は、やはりその聖剣を抜かれたか……」

「えっ？ああ、意外と簡単に」

騎士さんが語りかけてくる。

俺は聖剣を持って、目の前にいる騎士さんに対峙していた。
向こうもやる気らしく、まさに抜刀直前と言った風体だ。

「フツ、頼もしいお言葉だ……では、尋常に参ります！」

「あ、はい……って、え？」

「せああああっ！」

「うおおああああ！？」

いきなり切りかかって来たあああ！？

初撃を何とかして横に飛んで避ける。

瞬速と呼べる早さで切り出された騎士の刃は、俺がさっきまで立っていたところに突き立った。

「——僭越ながら、その腕、見定めさせていただく」

ギラギラと闘志に燃える騎士さん。

くっ！？こりゃあマジで命に関わる！

逃げ………待て、さっき決めたばかりだろ！？

戦うつてのは、こういうことを体験することだ！

いいさ、やってやる………戦ってやるさ！！

そもそも、何故こうなったのか。

話は今朝へと遡る。

聖剣を手に入れたあの後、我が身のことに喜んでくれたメルだったが、その報告のために神殿の方にいったん戻ると言った。

別れ際にひどく名残惜しそうな顔をしていたから、『また明日会えるだろ?』と言ってやれば、笑顔になってくれた。

「ああ、本来ならば一秒たりとも離れとうはございませんのに。メルはすぐに戻って参ります!」

やる気に満ちているようで——何に対するかは知らないが——なによりだよ。

メルと別れた俺は、これからどうしよう?と悩んだのだが、ふと気がつけば執事さんが目の前にいらっしやるじゃないか。

「お疲れ様でした勇者殿。選定の儀、見事果たされましたようで何よりでございます」

「いえ、俺の力じゃありませんよ。本当に、剣が選んでくれたみたい……」

あまりにも手応えが無かったので、それらしく言っておいた。

「今はお疲れでしょうから、どうぞお休みください。陛下へは私めがお伝えしておきましょう。明日、朝餉の席で改めて勇者殿からお伝えいただくということでもよろしいでしょうか?」

「あ、そうですか。わかりました。じゃ、お願いします」

そして翌朝。

つまりは今日の朝食の席でのことだ。

聖剣を手にしたことを伝え、王様はしたりといった風に満足そうに頷いていた。

二日連続で朝からプレッシャーが続くのかと思ったけど、今日はそんなこともなくて。

王様は機嫌が良さそうだった。

俺も昨日よりは飯が喉を通ったよ。

食べ終わって、食後のお茶（紅茶だった）を飲んでいるとき、ふと考えた。

昨日は装備と知識。

物語的には、勇者旅立ちまでのテンプレートだ。

さて、今日は何をするんだろうな、なんてのんびりと思ってた。

そんな時、王様が切り出したんだ。

「勇者よ。そちの腕前、我に見せてはもらえるかな？」

「腕前ですか？」

「ああ、そちの腕を疑うわけではない。聖剣に選ばれし者ならば、それだけで確かな証明にもなるだろう」

「はあ、でも、俺は……………」

平和な現代の日本で育った俺は、平凡な高校生だ。
竹刀ぐらいなら握ったことはあるけど、真剣なんかとはまったく縁がなかったと言ってもいい。

戦ったことなんか、それこそケンカ程度しかない。

そりゃ、昨日はフィオレとの会話の中で、前向きに行こう、勇者になるのを受け入れようとは一応決めたけどさ。

いざ剣を振れ。

そう言われると、どうしても恐怖が先に立ってしまふ。

渋る俺に、王様は何を勘違いしたのか、大丈夫だと言ってきた。

「何、ほんの腕試し程度だ。相手はこちらが選んだ我が国きつての使い手。安心して全力を出すがよい」

いや、それはまったく安心できないでしょう。

何だ我が国きつての使い手って。

しかし有無を言わせぬ王様の言葉に、あれよあれよという間に、俺は鞘に収めた聖剣を背中に、練兵場へと向かっていた。

石造りの城内を歩くと、妙に音が反響しているようだ。

……うん。流されてるなあ、俺。

俺にこんなに主体性がないなんて、まあ薄々は気づいてたけど、予

想以上だ。

やっぱり、ぐだぐだ考えてると出遅れるのか？

「コウヤ様！わたくしは貴男のお力を信じております！頑張ってくださいませ！」

「そう言われてもなあ……」

「貴男には聖霊様がついておられるのですから！」

いつの間にか現れ、俺のすぐ側に来ていたメルが励ましと応援の言葉をくれる。

自分と同じ年頃の美少女が、俺を応援してくれてるんだ。

これは、男として意地を見せないわけにはいかないな。

そうだ、前向きに考えろ！

今からやるのは腕試し、つまりは実践じゃない。
ならここで剣の使い方に慣れたらいいじゃないか！

うん、もしダメダメだったら、鍛えればいい。
初めから強い人なんている訳ないんだから。

と、そろそろ通路の趣が変わってきた。
練兵場に着く頃だろう。

薄暗い廊下に、外部の光が射し込んできた。

俺はパン、と両手で頬を張り、不安や雑念を振り払う。

「うつし！気合い入ったよメル！格好悪いところは見せられないからな！」

「はいっ！お気を付けて！」

笑顔が眩しいメルの声援を背中に、俺は光の中へと踏み出して――

『『『ワアアアアアア……………』』』

「え」

呆氣にとられた。

見渡す限りの人、人、人！観客席が埋まってるじゃないか。

よく見れば王様も、妃様も、姫様も、なんか勢ぞろいだ。

……………うーん、フィオレの姿は見えないけど……………あ、メルも上の席に回ったらしい。

あそこから応援してくれるのか……………

つて！これじゃまるで！

勇者のお披露目のつもりかよ！？

そんなオオゴトだったのか！？

練兵場は、城の裏手にある騎士宿舎に隣接するように存在した。

騎士同士の鍛錬・決闘に使われるそこは、サッカーができるぐらいの広さはあるそうだ。

ふと見渡せば、そのど真ん中に、ポツンと立つ一人の人影が目に入る。

アレが、俺の対戦相手だろうか？

緊張してきたな……

徐々に早鐘を打つ心臓を落ち着かせて一歩一歩近づけば、その男、騎士の容貌がはっきりと解った。

身長は180センチを越えていそうで、175センチの俺より目線一つ分高い。

体は細身、しかし鍛え抜かれたと解るような筋肉の付き方をしている。仁王立ちなのに立ち姿も様になっている。

顔は、精悍な、という言葉が似合うだろう。

男性にしては長めの、後ろで縛られた金髪が兜の下からこぼれており、鋭いブルーの目は、隙無くこちらを睨んでいる。

戦ったことがない俺でも解る。

あの人は、相当に強い。

まさに強者の覇気が滲み出ていると言っのだろうか？

正直、気圧された。

でも、ビビっちゃダメだ。

ゴクリとつばを飲み込めば、騎士さんが口を開いた。

「勇者殿、此度の仕合受けていただき誠に感謝する。お初……ではないのだが覚えておられないだろうからな。名乗らせていただく。我が名はライナー、近衛騎士隊副隊長、ヴァロン・ライナーという」
「俺は、コウヤ。コウヤ・ツワブキ」

荘厳に名乗りを上げる騎士さん——もといライナーさんに、俺も名乗りがえす。

つうか副隊長つて。

そりゃ強いよな。

さすが王様が王国きつての使い手と言うだけはある、気がする。

ライナーさんは腰に差していた両刃剣をすらりと抜くと、構える。その姿は優雅ですらあり、まさに熟練の使い手といった動きだった。

「近衛騎士故に、私は魔法を使えるが、今回はあくまで仕合。剣の腕だけで闘いましょう。——さあ、獲物を抜かれよ」

魔法なんて使われたら、対処の仕様がなにもんないかな？
助かった、のかな？

さて、これからが本番か。俺は背負っていた聖剣を抜くと、隙無く構えるライナーさんに向けて、白刃を構える。

こうして、俺の初めての戦いの幕は上がった。

「くっ、ぐあっ！」

「受けるばかりでは意味はありませんぞ！避けるばかりもまた然り！！」

ギャリツ、ギインと、剣戟の音が練兵場に響きわたる。

解ってたことだが、俺なんかじゃあ到底勝てない。

動き、技術、経験、あらゆる面において、俺はライナーさんに適わない。

観客席のことなんて意識の中からはもうすっ飛んでいた。

目の前の相手をするのがやっとで、他に意識なんか回せない。

何とか、迫り来る刃を受け止め、避けるぐらいのことは出来た。

逆を言えばそれしかできないんだけど。

「シィッ！！」

「っ、ぐはっ！？」

つくそっ！

気を抜いた瞬間に振り上げられた下段からの斬撃に、なんとか聖剣を盾にするが弾き飛ばされる。

ライナーさんは追撃はせず、二人の距離は10メートルほどに開いた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……………！！」

「……………」

肩で息をつく俺に対し、息一つ乱さないライナーさん。
開始から五分、ここまで保っただけで奇跡だ。

いや、ライナーさんは勿論手加減してくれているのだろうが。

なんとか聖剣を構えるが、最早勝ちはこちらにあるのか一目瞭然。

しかし、俺は諦められなかった。

初めてならば、仕方ないかもしれない。

だけど、少なくともここで剣を握ったのは俺の意志だ。

その意地は貫きたかった。

「ハツ、ハツ、ハア……………」

息が整いだした俺だったが、先ほどから微動だにしないライナーさんが気になり、眉をしかめる。

すると、ライナーさんは待っていたかのように言葉を紡ぐ。

「——予想以上に対応は良かった。だが、それだけ。貴殿は、戦いを知らない兵士と同じだ。そんな貴殿に、勇者としての責が勤まるとは思えない」

「——ッ！！」

……確かに、その通りかもしれない。

どんなに息巻いても、所詮俺は戦いを知らない子供だ。

今の俺なんかじゃ、魔王の討伐なんかとうてい適いつこないぐらい、誰にだって解る……………

……………でも、でも！

そんなに、簡単に諦めたくなんてない！！

怖じ気付きそうになる足に力を込めて、精一杯に前を睨む。

怯む様子のない俺を見て、ライナーさんは一歩踏みだし、剣をチャキリと肩口に構える。

その青く鋭い目は俺を見透かすかのように、細められている。

「その気概は素晴らしい……………が、仕方がない。引導を渡させていた
だく」

ザッザッと近づいてくる彼に、俺は逃げだそうとは思わなかった。

負けるのは、イヤだけど仕方ない。

だが、ただで負けたくはない。

なんとか一矢報いたいんだ——その力が欲しい！

そう願った瞬間、聖剣から白い光が溢れ出した。

それには、俺も、ライナーさんも、静まりかえっていた観客席のみ
んなも驚愕したようで、目を見開いていた。

だが、俺には解った。

その光に触れたとたん、体が軽くなり、どうやればこの剣をもっとも巧く使えるのが、頭の中に『動き』が見えた。

その時、俺は本能的に悟った。

これが、聖霊の加護――

これなら――いける！

ギリ、と塚を握り直した俺に、ライナーさんは驚き醒めやらぬと言った顔で、しかし冷静にこちらを伺っていた。

「成る程……それが『聖霊の加護』。聖剣に選ばれたというのは、名ばかりではないようだ――宜しい！これが本領か！ならばその力、我らにとくと見せてみよ！！」

彼らしいクールな笑みを浮かべながら、ライナーさんはそう吠えた。肩口まで持ち上げられた剣は横一文字に構えられ、それが彼の本気の現れだと、解った。

今なら解る。

彼は、本気の一撃で俺を迎え撃つ気だ。

「――なら、乗るしかないだろ！！」

やっと彼の本気を引き出せるんだ！！
一矢報いたい？

そんな甘いもんじゃなかった！

白い光は留まることなく溢れ続け、俺に力を与えてくれている。

「全然！負ける気がしない！！」

俺は聖剣を中段に構えると、体中のバネを引き絞り、一気に地を蹴った。

地面が爆ぜる。

俺は人生で一番速いんじゃないかってスピードのまま、ライナーさんに突っ込む。

「オラアアアアアア！！」

「ハアアアアアア！！」

ライナーさんが横一文字に振るった刃が、俺に迫る。

だが！遅い！！

刃が俺を切り裂くと思われた瞬間、中段から大上段にまで振りかぶられていた聖剣を、一気に振り下ろす。

「ウオオオオ！！」

パキイン、と。

甲高い音を立て、鋼の刃は中程から先が宙を舞う。

それに氣を取られることなくすぐさま引き上げ剣は、ぴたりと、ライナーさんの首筋の前で止められた。

「——俺の腕、どうでした？」

折れた剣を片手に、目を見開いていたライナーさんだったが、ふと笑みを漏らすと練兵場に響きわたるかのような澄んだ声で、それを告げた。

「——素晴らしい。私の、負けだな」

『『『『『フアアアアアアア………！！』『』『』』』』』

「きゃあ——！！コウヤ様あ——！！やりましたわ！！」

同時に沸き上がる歓声の嵐。

メルは勿論のこと、見ていた人達の大半が、驚きと、賞賛の言葉を投げかけてくれている。

「さすが、さすがは勇者殿。貴殿は本物で在られたか。これまでの無礼な真似をお許しく下さい」

ふと見れば、ライナーさんがひざを突き、頭を下げていた。

いや、そんな大それたこと恐れ多いですよ！！

「あ、頭を上げてくださいよライナーさん！？無礼とか、そういうのはいいですから」

「しかし……」

「俺も、いい経験になりました。これが初めての下手くそだったけど、聖剣の本当の力も解りましたし！良ければまた、訓練に参加させてください！これからもよろしく、お願いします」

俺がそう言って手を差し出すと、ライナーさんは降参を宣言したときのような柔らかな笑みを浮かべた。

今気がついたが、この人えらいイケメンだな。
いや、いまは置いてこう。

ライナーさんは立ち上がると、俺の手を取った。

金髪が風に靡き、負けたというのにその姿は清々しさに溢れていた。

「こちらこそ、よろしくお願いいたします、勇者殿」

「コウヤって呼んでください、堅苦しいのは、ちょっと苦手で」

苦笑いで頭をかく俺に、ふむ、と頷くとライナーさんは軽く笑ってこう告げた。

「では私のことはヴァロンで構いません。これからは、そう呼び下さい、コウヤ殿」

「ああ、よろしく、ヴァロンさん！」

「こちらこそ——しかし、あれが『聖人』の力か。噂に違わず凄まじいものだ」

「本当に使いこなせたら、俺はもっと強くなれる気がします。だから、よければ俺に剣を教えてくださいませんか？」

「——それは、光栄だ。勇者殿の剣の師となれるとは。喜んで、鍛えて差し上げましょう」

お互いに剣を交え、お互いの人格を感じ合うことが出来たのだろう。笑顔で握手を交える俺たちは、既に友情と言ってもいい絆が出来ていたと思う。

こうして、俺は異世界三日目にして、初めての男の友達、こちらの世界での『兄貴分』と呼べる騎士に出会った。

T o B e C o n t i n u e d

参の話 廻る世界の前日談(前)(後書き)

主人公の名前すら出てこない不思議

参の話 廻る世界の前日談（後）（前書き）

後編です

さて、この勇者キャラは立っているのか？

なんかもう既に勝手に動くんです、キャラが

参の話 廻る世界の前日談（後）

「素晴らしい戦いでしたわ！わたくしまだ興奮が収まりません！！」

「はは、ありがとうな。俺にとっても、今日の一戦は大事な試合になったよ」

「初めてであれだけの聖剣の力を引き出すなんて！やはりコウヤ様は聖霊の御子なのですわ！！」

「ハハハ、大げさだよ」

ある意味御前試合（昼前だったし……我ながら寒いな）を終えた俺は、ヴァロンさんと鍛錬の約束を交わし練兵場を後にした。

彼も副隊長という仕事柄忙しいようだが、新しくできた友人のためならば苦にはならないと快く引き受けてくれた。

本当にいい人だな。

そして今は、昼食を食べおわり、メルに案内してもらい城の中を探検してる最中だ。

三日目にしてやっとかとも思わなくもないが、まあ、色々立て込んでたんだし、仕方ないよな。

メルも試合を見てからはいつにも増して笑顔が華やいでるし、そんなに俺が勝ったのを喜んでくれてたなんて、なんか、嬉しいな。

きやいきやいと明るいメルと話しながら、俺たちは色々な場所を見て回っていた。

城の中心部にある謁見の間の場所に始まり、兵器庫、大ホール、大食堂にサロンや、左塔にある書庫、右塔にある大臣の執務棟など、様々なところを都度俺に説明しながら、歩いていく。

メルは神殿も見せたがっていたようだが、城から少し距離があり、今から出て見に行くのは躊躇われたのでそれはまた今度となった。

現在は、一回の正面中央の大講堂を覗いているところだった。

俺は、その荘厳な雰囲気と、豪奢かつ繊細な細工がこれでもかと散りばめられた大講堂に圧倒されていた。

やはり、世界は変われどこういった建物の厳かな雰囲気は変わらないようだ。

「ほへえー、やっぱり城って広いんだなあ」

「神殿の立地はここよりも高い位置にありますの。もっと広いのですわ」

「へえ、神殿は標高が高いのか。そういえばこの城って、他のよりはでっかい方なのか？」

腕に抱きつくメルに問いかけると、彼女が答えを返そうとして――

「ファージール城はこれでも最低限の機能に絞られていると言われております。たとえば隣国、セルバランカ皇国の大皇宮などは、世界一壮大な建築物とか」

「ッ!」

「へえ——え、誰？」

突如聞こえた柔らかな声。その声に後ろを見れば、ぽやぽやとした柔らかな笑みに、栗色のウェーブが掛かったロングヘアの美少女が立っていた。

身に纏う淡いピンクのドレスはファンシーで実に彼女によく似合って——

つて!?

俺はその少女を見たことがあった。

「姫様？何でここに？」

ここ、ファージール王国の姫様その人であった。

彼女は俺の問いに、変わらぬ笑みで答える。

「勇者様のお姿をお見かけしたものですから、何をしたらいいのかになりました」

「ああ、ちょっと城の中を案内してもらってたんです」

そういえば、メルが静かになったな？

そう思つて彼女を見れば、俺の腕に抱きついたままむっとした顔で、姫様の方を見ていた。

何か既視感が……… ああ、フィオレにもこんな感じだったな。

なんだろ、姫様とも仲悪いのか？

いかん、美少女同士が仲が悪いなんて、非生産的だ！

……… いや、何を言ってるんだ俺は？電波が………

そんな俺をよそに、メルは姫様に噛みつくように言葉を投げつけた。

「イリーナさん、一国のお姫様がふらふらと出歩いてるなんて。よっぽどお暇なのかしら？」

「あら、あらあらあら！メルさんお久しぶりね！もう、最近こちらに会いに来られなかったでしょう？折角の幼なじみなのだから、もう少しお顔を合わせましょうよ？」

「くっ！態とですよ！！それに、生憎わたくしは忙しいんですの！お暇な貴女と違って！！」

「そうなの？……… 最近はフィオレさんもあまりお話出来ないし。少し、寂しいわ」

「くうっ！そ、そんなことはどうでもいいんですの！今はわたくしがコウヤ様をご案内して差し上げてるのですから、お邪魔しないで

ほしいですわ！」

……これは、メルは、姫様が苦手なのかな？

言い立てるメルに対して、常にぼやぼやした姫様はあんまり気にしてない感じだし。

しかしまさかこんなところで意外な繋がりを聞いたもんだ。
フィオレと、メルと、姫様が幼なじみ。

まあ、そう言われたらそんな風にも見えるな。
だいぶ気安い感じだし。

普通ならお姫様相手にはもっとこう、弱気になりそうなのに、メルは全然引いてないし。

そついや、今日はフィオレには会ってないな。
いや、賢者ってぐらいだし、忙しいんだろうな。

姫様もそんなこと今言ってたし。

一方、姫様はメルの言葉を聞きつけたらしく、あら？と言。

「ならば私もついて行ってよろしいかしら？」

「はあっ!？」

「え、別に、構いませんよ？」

なんていい考えかしら、と手を叩き合わせる姫様に、メルは素っ頓

狂な声を上げていた。

そこまで反応しなくても。

「いいじゃないか。城の持ち主さんなんだし。悪いことはないだろう？」

「コウヤ様がそう仰るなら……ええい、忌々しい女ですね。折角の時間を台無しに……」

例によって不機嫌そうに、後半は何かを呟くメルだったが、一応の賛成は貰えた。

「じゃ、行きましようか姫様？」

「はい！」

そう言って歩き出したはいいが、大半の施設はもう回っていた。

時間も夕焼けがきれいな頃合いだし、後少し経てば夕食だろう。

まあ、ブラブラ散策する感じでいいか。

そうになると、歩き慣れてるだろう姫様は暇だろうと、専ら会話に勤しむことにした。

「あの、姫様。そういえば、こうやってお話するのは初めてですよね？」

「そう言えば、そうかしら？そうね、勇者様のお顔は何度も見させ

ていただいたけれど、お話しするのはこれが初めてね」

思い返せば、初めては視界の端に写ったことで、以降食事などで顔をあわせるも会話になったことはなかったな。

姫様もそれに気づいたようで、

「じゃあ、勇者様のお話し聞かせていただけるかしら？」

とのたまわれた。

まあ、時間つぶしだし、いいかな？

隣で黙っちゃったメルが怖いけども。

「そうですね、まずは、その勇者様っての、変えてもらっていいですか？なんか、むず痒くて」

「あらあら、では、コウヤ様？で、よろしいかしら？」

「あ、全然OKです。すいません、姫様にこんなこと言っちゃって」

「構いませんわ。では、私も姫様ではなく、イリーナと。そう呼んで下さいな」

そう仰る姫様は、実に可愛らしいのだが、流石に姫を呼び捨てはまずいだろう。

「イリーナ様？」

「イリーナ」

「……イリーナ、姫？」

「イ・リ・ー・ナ」

「……イ、リーナ」

「はい！」

「——ハ、ハハハ」

にこり、と満面の、満開の笑みを浮かべる姫様に、思わず乾いた笑いが漏れた。

な、何だ、この圧迫感ッ！！

ドドドドドドと、爆音かき鳴らす効果音が流れてきそうな姫様の笑顔の圧力に、思わず屈してしまった。

まあ、本人が許可してるし、いいか。

「……フン、姑息な手でコウヤ様の気を惹こうなんて、なんと必死なのかしら。コウヤ様はわたくしの勇者様ですよ。貴女みたいな女には死んでも渡すものですか……………」

メルはなにやら呟く以外は静かだが、先ほどからオーラが怖くなってきた。

「それにしても、今日のコウヤ様の剣は素晴らしかったですね。私

思わず見ほれてしまいました。ああも聖剣の力をお使いになるなんて、まるで先代勇者様の再臨だと、皆コウヤ様に期待しておりますよ？」

「ハハ、光栄ですねー」

「…………コウヤ様が素晴らしいのは当たり前ですわ。聖霊様の使わされた最強の御方なので。だから貴女なんかには釣り合わないのよ、わたくしこそがコウヤ様のお側に……………」

前門のぼやぼや、

後門のぶつぶつ、だと！？

そんな危機的状況乗り越える主人公みたいなスキル、俺にはないって！？

誰か助けてくれと内心叫んでいると、俺たちはいつの間にか大講堂の裏手側の建物にまで来ていた。

人氣が無く、いかにも寂れきったその建築物。

そこは大講堂を挟んだ城からの死角になっており、俺はその時に初めてそれを見た。

——なんだろう、凄く、気になるな…………

「なあ、メル、イリーナ。あれ、何かな？」

「はい？」

「アレとは…………ああ、アレは、所謂牢獄ですの」

同時に振り向いた二人のうち、メルが答えてくれる。

「庶民の牢獄はまた別の場にありますが、あそこは高貴な身分の者や大罪を犯した者を収容する牢ですわ。まあ、近頃は聖霊様の教えに刃向かうような愚か者は殆ど出ておりませんが」

「てことは、殆ど使われてないのか。だからこんな寂れてんだな」
続けられた説明に、所謂上等監獄なんだな、と納得する。
寂れきつた理由も、解った。

——ただ、何というか。
よくわからない。

ただど何か、ドス暗い『何か』がそこに、居るような気がした。
気が付けば、背中 of 聖剣が、少し熱く、熱を帯びている。

まるでそこに討つべき『仇敵』がいるかのような反応——

「——そう、近頃は」

心底嫌悪を表したような表情で、メルが牢獄の方を睨みつける。
自身の疑念もあいまり、気が付けば俺はメルに訪ねていた。

「あそこに、『何か』居るのか？」

険しい表情のままのメルに代わり、緩やかな笑顔のままの、イリーナが答える。

「先代の勇者様達、五人の英雄達が、魔王を討ち果たされたとき。魔王は確かに、この世から消え去りました。それで、世界には平和が戻りました——しかし、一つ、憂いがありました」

「憂い？」

「先代魔王には、一人の親友が居ました」

魔王の、親友？

どこかで聞いたようなフレーズ——あつ！

思い出した、昨日、最後にフィオレに聞こうとしていたことだ。あの後流れる状況を前に、すっかり忘れていた。

「その、親友が憂いだっていいのか？」

「はい。魔王は、魔族にして希代の呪術師。魔導師とは対局に位置する悪しき存在。そして、そんな彼の親友も、また一流の呪術師でした。一説には、魔王すら越える術師であつたと」

一流の……昨日フィオレが言っていたことが思い返される。

『強力な呪術は、まさに何でもあり』

そんな反則的な敵を二人も前にして、それでも世界を守りきったという先代勇者が、ひどく遠い存在に思えてきた。

いや、俺の無力感は後だ。

「その『親友』は、英雄の一人『大賢者』が打ち倒しました。しかし、止めを刺すことは出来なかった」

イリーナは淡々と、普段の浮き雲のような笑顔のまま、冷えた声音で語り続ける。

「だから、『大賢者』は、その『呪術師』を封印という形で抑えるしかなかったと聞きます」

此処まで言われれば、嫌でも解る。
つまり、そういうことなのだろう。

あそこには――

「居るのか、その、『魔王の親友』が」

「――はい」

イリーナは、そう言い切った。

「――魔族の長、魔王はただ、討ち滅ぼすべき存在。聖霊様の敵、つまり我ら人間の怨敵ですの」

押し黙っていたメルが口を開いた。
しかし、そこには隠しきれない嫌悪の感情がありありと含まれている。

「魔王の親友は、わたくしたちにとって最悪とも言える存在でしたわ」

「そんなに、悪どい奴だったのか？確かに、魔王と連nder時点で大概に駄目だろうけど。でも、そいつも呪術師ってことは魔族なんだろ。だったら、魔王とどう違うんだ？極悪非道で血の涙もない、とか？」

俺はふと気になった。

まあ千年前の存在が生きていることについてはいい。魔族は長生きだって聞いたし。

ただ、メル的口振りでは、その親友とやらは全く持って許せない、そんな不倶戴天と言っても過言ではない存在らしい。

一体何をしたらそんなこと言われるんだ？

こちらを一瞥し、メルは答える。

「ソレが最悪と言われる理由、最たる理由は——ソレが『人の身』であつたということです」

『人の身』——つまりは、人間？
そんなバカな。

「え、いや、人間？人間は呪術使えないはずじゃあ……………」

そこでまた、脳裏に昨日の一言が浮かぶ。

『地獄のような状況でも折れない精神力の持ち主なら——』

「無理じゃ、ないのか……………」

俺がそう呟けば、メルはコクリうなずく。

「忌々しい限りですわ。聖霊様を裏切り、あまつさえ呪術に身を堕とし。そのような者が生きていと言っただけで、憤怒の炎に身を焦がしてしまいそう」

「しかし、今やその彼も地下深くの大牢獄、大賢者謹製の魔術要塞『大戒牢』に封じられています。文献でしか残らぬ彼の者の存在ですが、『大戒牢』が作動しているならば、『呪術師』は地下に居るはずです」

メルに続けてそう言うイリーナだったが、俺は心底驚いていた。

そんな反則みたいな存在が、出発地点の地下深くに眠ってるなんて

しかもそれが元・人間？

フィオレの話では、常人ならば人が呪術を使いこなすのは異常。

じゃあ、魔王並みと言われたそいつは、どんな地獄を見たんだよ。

俺は背筋に寒気が走った気がした。

呪術師ってのは何でもあるのか……………

まあ、今は封印されてるみたいだし、起きることはないんだろうか
安心だ。

聖剣が高ぶっているのは、加護を与えている聖霊とやらの仇敵が側

にいるかららしいが、

今の俺では、そんな存在にはどう足掻いたって勝てやしない。

圧倒的な存在の話を聞いてしまうと、自分の今日の戦いで拵んだ経験なんて、まるで意味のないことに思えてしまう。

これじゃいけないな。

うん、今は一步一步、着実に強さを磨こう。

ヴァロンさんという剣の師も出来たんだ。

今はまだ地球に帰れないなら、この世界で死んでしまわないように、

今は、強くなろう。

決意を新たにした俺は、未だ険しい顔のメルと普段通りのイリーナの手を引く。

「さ、遅くなっちまった。帰ろうか」

「ふあい！？コウヤ様あん！！」

「あらあらあら、そうですわね」

一瞬で何かが崩壊したメルと、相変わらずのイリーナ。

俺は、先程のことは記憶の奥にしまい、今はただ、出来ることをこなしていくと決めたのだった。

だから、聞き逃していた。

後ろを振り返ったイリーナが小さく、呟くようにこぼした、その一言を。

「——『魔人』は、今宵はまだ起きません。彼の出番は、何時かしらね？」

——城内、王の執務室にて、四人の男女がそこに居た。

一人は部屋の主、ファージール国王。

一人は牢獄の管理官、刑部大臣のモルガン。

一人は、昨日大臣と密談していた魔導師の青年、ワレフ。

そしてもう一人、唯一の女性にして未だ年若き少女——

王はその名を呼ぶ。

「ふむ。話しは聞いておるな、フィオレ・ヘインストールよ」

「はい、陛下」

少女——フィオレは恭しく頭を垂れ、礼を取る。
そんな少女に、王は語る。

「此度、勇者の力を見聞いたが、あれは確かに本物だ。これで、本来の『魔王討伐』に問題はない——だが」

王はそこで一度切ると、未だ平伏するフィオレに頭を上げさせた。その蒼い瞳をのぞき込みながら、『力』を求める王は語る。

「次善策は常に仕掛けておくものだ。そして、これは次善策などではなく、間違う事なき『鬼札』となる」

王はフィオレからワレフに向き直ると、それについて問うた。

「万事、手抜きはないな？」

「勿論でございます。賢者殿と予め一度見聞に参りましたところ、問題ないとお言葉をいただきました」

「ふむ、そうなのか、賢者よ」

「——はい」

すこしの逡巡の元、蒼い少女は答えた。

フィオレは今、彼女の家系始まって以来、文字通り、その先祖以来の大任を任されようとしていた。

『賢者』を名乗る家系に産まれたものとして、彼女はこの責務を果たさねばならないのだ。

震えそうになる小さい体を、気力で一杯に抱き留めて。彼女はその言葉を告げる。

「私の『血』において、必ずや制して見せます」

「よくぞ申した。ならば任せよう『賢者』フィオレ・ヘインストールよ。その血を以て、此度の任、必ずや完遂させよ」

鷹揚に頷き、王は高らかに命じる。

それを受けるは、齢にして16の可憐なる少女。しかし、その瞳に宿る決意は、蒼くたぎる。

「拝命致します。私の身命を賭して『呪術師』の制御、完遂して見せます。」

我が『賢者』の称号、そして、我が祖『大賢者』アルディレイタ・ヘインストールの名に賭けて――」

『大賢者』の血を引く少女は、静かに、世界の戦乱にその身を投じた――

To Be Continued

参の話 廻る世界の前日談（後）（後書き）

主人公にして『呪術師』、その名も ■ ■ ■ ■ ■ !

次話にて推参！

開幕・零の話 呪術師は名乗りを上げる（前書き）

やっと、やっと主人公が名乗りました

今回勇者君はお休み

やっぱり一人称は難しいですね

開幕・零の話

呪術師は名乗りを上げる

数十年、数百年、或いはもっと前。

それが何時だったのかは解らないが、しかし何ら問題はなかった。

何故なら、ここには時間の概念など有って無いようなものだったから。

闇の中、いつもの様に、二人——『アル』と『彼』は談話していた。

それは唯の暇潰しであり、形式上は仕事でもあり、しかしやはり、暇潰しでしかない時間だった。

『それ』を始めてより早十数年。

若々しさ特有の甘みを含んでいたアルの声は、今では年齢相応に重みを増し、荘厳な色を帯びていた。

こうして度々会話することを重ねてきた『彼』だったが、相手の語る話題に不自然に欠けていた部分があることに思い至る。

「———そういやよ、あのバカの話は聞かねえなあ
あのバカ？」

はて、誰を指しているのか、と迷う間もなく、アルはそれが誰に付いてなのかを察した。

彼にしてみれば、それで十二分に通じてしまう。

「キャロルのことかい？アイツなら、とつくの昔にどこぞやらへと

旅に出たよ。会うどころか、音信不通。従って、話題に上げることが出来ないね」

「旅？ああ、はいはい、見当がついたぞ。確実に頭の悪い理由だ。間違いねえ」

「的を得ているな。そう、実に頭の悪い、アイツらしい理由なんだよ。つまるところ、武者修行らしい」

「世界を救った英雄様の一人が武者修行。あのバカは何と戦うつもりなんだ？ 洩垂れに下克上でもかます気か？」

言っておきながら何だが、『彼』はそんなことは微塵も可能性のある話だとは思っていない。

ただ、言ってみただけなのだ。同様に、アルもそう思っているらしく、額を右の人差し指で押さえながら、ため息をつく。

「アレがそんな風に頭を使うことを考えているなら、私達の旅はどれだけ楽だったろうか」

「知らねえよ。アレー人欠けたぐらいじゃ、テメエらの愉快的な御一行はパワーダウンしねえだろ」

「当時の私達は若かったな。毎日があの調子だった。カイも余程に苦労していたが、一番はやはり私だったさ。断言できるね」

平然と言い切るアルに、『彼』はニヤニヤとしていた面を引っ込め、呆れたような目線を送る。

「テメエも大概に色物なんだよ。まともな人間に、この俺が倒せる
と思ってるのか？」

「失敬な。私は正常な人間だ……と言いたいが。しかし本人にそう
言われてしまうと、否定の仕様が無いじゃないか」

「ああ、あの頃は楽しかったんだがなあ。ハーロックと連んで、『
あっち』でブラツいてりゃあ、それなりに暇は潰せてたんだ」

「まあ、確かに、君にとっては『こちら』は些か刺激に欠けるんだ
ろうが。私達からすれば、『あちら』は危険が過ぎる」

懐かしむような表情を浮かべる『彼』に対し、アルは一つ思ふこと
があつた。

いい機会だ。それを、今聞いてしまおうか。

「なあ。君は、本当にここから出たいか？それは、本心
から？」

「当たり前だろ。ここは一分一秒が無駄なんだよ。俺あ怠惰は好き
だが、停滞は嫌いなんでな」

そうか、とだけアルは呟き、言葉を返さなかった。
流れる沈黙、しかし『彼』は口を開かない。

ただ、眼前の悪友の言葉を待つのみだ。

やがてアルは、そうだな、と呟き言葉を発した。

「千年」

「あん？」

「千年待つてくれ。それぐらいで、私の術式にも綻びが生まれる。そうすれば、『形はどうあれ』出られるだろうさ」

「長えよ。長過ぎる。俺を退屈死させてえのか？まあ、確かに、俺は死なねえが………しかし、いいのか？そんな簡単に容認しちゃうのは。テメエは国家の重鎮様だろうが」

「構わないさ。どうせ私は、その時には死んでいるのだから」

「テメエからそんな無責任な発言が飛び出すたあな。意外、ってかいいのかよ大賢者？出たが最後、この国は滅びちまうかもしれないぜ？」

「ああ、勿論だとも。そうなったとしても、私にはどうすることもできん。君と相對するのは、私の子、孫、子孫等であり、彼らこそが相對すべきなのだから」

言い切るアルの声には、絶対的な確信が漲っている。そうになると、心の底から信じている、信じることの出来る力強い声だった。

挑発するような『彼』の言葉なんぞでは、物ともしない凜とした声だ。

やはり、と『彼』は思う。これだ。この『強さ』。

これこそが人間の面白いところだ。

悪徳と怠惰に生きる己にとって、やはり人間とはいいい暇潰しだ、と。

そんなアルの様子に、『彼』はほう、と目を細める。口元には皮肉気な笑みを乗せて。

「乗り越えるべき試練ってか？なんてえ薄情なご先祖様だよ」

「それに、私は確信しているからね。そんなことになれば、我等が子孫は、必ず君を打ち倒すと」

「言うねえ、大賢者」

「私達に出来たんだ。後世の者に出来ないなどと言う道理はないだろう？」

アルにだって、自分達が世界を救った英雄であり、魔王を討つというそれが生半可な物ではなかったという自覚はある。

彼らだから出来た、彼ら五人だからこそ乗り越えられた試練だったと。

彼は、自分が千年後に禍根を残すような真似をしているのは理解している。

知りながら何もしないのは、人は愚かだと罵るかもしれない。

しかし、聡明な大賢者は期待せずには居られないのだ。

例え時代が移り変わろうと、自分たちが救った世界は、自分たちの跡を継ぐ人々は、この程度の試練は自分たちの力を以て乗り越えられるだろうと。

それに、退屈だと言い募る眼前の悪友に外を見せてやるには、それぐらいの年月を置くのが良いのではないかとも考えていた。

そんなアルの思いを感じたのか、『彼』は面白そうな笑みを深めた。

「解った。千年だな？そいつを信じるぜ、アル？」

「ああ、信じてくれ。私は必要ない嘘は吐かない主義だからね」

「そういう奴に限って口先三寸で善人を丸め込むんだぜ？」

ケラケラと笑う『彼』に、やはり君は失礼だな、と返すアル。

「さて、私もこの暗闇に目が慣れてきたものだが………今回はここいらで仕事は終わりだ、早く我が家に帰るとしよう」

「どしたよ、最近やけに帰りたがるじゃねえか？嫁に浮気でもされたのか？」

「もうそんな心配をする年ではないさ。第一我が妻は実に美しく、貞淑だ。どこぞの不逞の輩なぞ齒牙にもかけんさ！ま、それはいい。実はね、近頃初孫が生まれたのだよ。これがもう可愛くて仕方がない」

「孫？ああー………外じゃあそんなに時間が経ってやがったか？」

『彼』は、いい年して惚気に入る悪友をスルーして、その言葉の中の一単語を拾った。

どうやら眼前の悪友はマイホームパパから孫煩惱爺にレヴェルアップしたようだ。

普段はクールぶった顔が、孫のことを口にした瞬間ふにやりと歪んだ。

そう言えば、かなり昔に娘が出来たと言っていた気がする。やはり時間の流れにはかなり疎くなっているらしい。

それも致し方あるまい。

外と『彼』を繋ぐものはこの悪友しか居ないのだから。

「まあ、それもあと千年の辛抱だ。じゃあな、アル。」

「ああ、また——そうだな、千年後に、また会おう」

帰りしなに不可解な言葉を投げつける大賢者を、『彼』は怪訝な声で送る。

「おいおい、もう来ねえつもりか？」

「いや、また来るさ。しかし、君のことだ。千年の件なぞすぐに忘れてしまっただろう？ ならば覚えている内に言っておこうと思つてね」

「あ、テメエバカにしゃがって。忘れるはずねえだろ阿呆」

「いや、予測してやろう。私が最後にここを訪れたとしても、君は絶対淡白に返すはずだ。君は、そう言う奴だろう？」

疑問というよりは確信といった色を帯びるアルの言葉。

少し思考してみれば、確かにそうかもな、と『彼』は納得してしまった。

成る程、この悪友はこの十数年で『彼』のことをかなり知り尽くしたようだ。

それこそ、『彼』の親友だった魔族の王と同じぐらいに。

だが、それもいいかもしれない。

『彼』は、思わず浮かんだ考えをあざ笑いながらも、眼前の悪友に

律儀に言葉を返した。

「千年後か。テメエは死ぬんじゃないかったのか？まさか人間やめる気か？」

「いや、私は人間で居るさ。生涯、例え脆弱なれど、この身は人の其れでありたいからね。でなくては、妻と共に添い遂げられんだらう？」

「そうかい、そうかい——解ったぜ。千年後に、また会おうや」

言葉は別れたが、その中には次のではなく、『いつか遠い日の再会』への思いが込められていた。

それを聞き届けた大賢者は、笑みを以て一言。

「私の子孫に宜しくね」

そして響いた、ガチャリと馴染みの施錠音。

『彼』は今し方交わした会話の可笑しさ、独りであるのに思わず声を出していた。

「クツ、ハハハハツ！何だ、今のは？まるで今生の別れか？どうせまた直ぐ来やがる癖して——まあ、いい。これで、最期の分は今済ませたんだ。お望み通り、テメエの『終わり』にやサラツと流してやるよ」

笑うだけ笑い、『彼』は静かになった。

退屈で退屈で仕方がない、しかし、出られるという目処は立った。
かの高名な大賢者がその口で語った約定だ。

ならば信頼してやろうではないか。

『彼』は静かに目をつぶり、千年の暇をどうしようかと思案した――

.....

.....

.....

「――随分と懐かしい思い出だ。そうだ、そうだったな。やっと
時間か.....」

千年前、悪友と交わした言葉を、『彼』は決して忘れなかった。

退屈と停滞に磨耗するような柔な精神はしていない。しかし、それでも、過去の記憶は色褪せてきていた。

だが、今では不思議と鮮明に思い出せる。

全て、総てを。

悪友との無駄話も、親友との語らいも、昔の自分の生き様も――
全てはつきり思い出した。

ここは『大戒牢』と呼ばれる、あらゆる外世から隔絶した暗闇の底

だ。

人の作り出した、紛い物の闇。

それでいて、本物のように優しく包むわけではない、ただただ呑み込む暗い闇。

常人なれば、存在するだけで等しく拷問足り得るそこは、『彼』にとっては退屈な場所ではない。

だから『彼』は、無意識的に外を知りたがった。
待てば出られるはずだ。

しかし、待っているだけではつまらない。

あらゆる魔術、あらゆる呪術を否定する空間にありながら、『彼』は断絶された外を察知することが出来た。

——そして、三日前。

彼の興味をいたく引く、『世界』の揺らぎを感じ取った。

それは、偏に『彼』の尋常ならざる力量の表れでもあるが、『彼』にとって、そんなことは当たり前前の些細なことに過ぎない。

彼にとって重要なのはただ一つ。

『時は来た』と言う事実。

暗闇に投げ込まれた一つの眩き、『俺も混ぜろよ』。それに呼応するよつに、千年の停滞は、流動へと向かいだす。

ギリギリ、と開いた久方ぶりの牢を見て、『彼』は柄にもなく高ぶっている己を自覚した。

徐々に関き、開ききつたその扉から中に入ってきたのは、一人の少女。

緊張したその面もちも、蒼い髪も相俟って、『彼』に悪友の幻想を見せる。

「———よお、久し振りだな。アル」

「……………？何を？」

違うとは解っていたが、その色がやけに懐かしく、普通りの声を掛ける。

少女は怪訝そうに『彼』を見るばかりだ。

当然だろう、『彼』とて解っていてやったのだ。

『彼』は直感的に見抜いた。

この少女は、かの悪友と同じように、イジリ甲斐のある人種——
つまりは真面目な奴だと。

「いや、悪いな。昔の知り合いに似てたもんでよ。で、何か用か嬢ちゃん？」

「……………貴方が、『呪術師』で間違い有りませんか？」

「ああ、ああそうだ。俺が、その『呪術師』さ」

返される声は堅く、やはり『彼』の飄々とした声とは対照的だ。

少女は、怯えを前に表さないように腹に力を込めた声で、その用件を告げる。

「貴方を、ここから出します。そして、王命により貴方に協力して貰うことがあります」

「そう堅くなるなよ。久し振りの会話だ。俺だって楽しみたいんだぜ？」

立場は拘束された罪人と、その上に立つ看守であるはずなのに、そんな殊勝な物には誰がみても見えないだろう。

何という自然体か。

泰然自若を体現したような『彼』の言葉に、少女は焦ったような声で、しかし毅然と語る。

「貴方に施された封印式。それを私の『血』を以て制御します。貴方には、私と一緒に来て貰います。拒否権はありません」

「ああ、いいぜ？出してくれるんだろう？命令だったか、聞いてやろうじゃねえか」

『彼』がそう言うと、少女は呆氣にとられたような表情を見せる。悪党と誉れ高い『呪術師』か、素直に従ったのがそんなに不思議だろうか？

『彼』は、そんなことを気にしながらも、しっかりと少女の言葉聞いている。

「なあ、嬢ちゃん。『血』を以てつつたな？『封印式^{コレ}』をどうにかできるのは、俺の記憶じゃあアイツの血族しか居ないわけだが……嬢ちゃんの家系はそういうことか？」

『彼』が問いかければ、はっとしたように少女は体を持ち直す。

「はい」

そして一つ頷いて。

疑問に答えるために、その『血』の流れを証明するように、高らかに名乗りを上げる。

「私は、『賢者』フィオレ・ヘインストール。『大賢者』アルディレイタ・ヘインストールの血族です。我が先祖の名に賭けて、私は貴方を従えます」

「——俺を従えると来たか。面白い、よく言っただな嬢ちゃん。いぜ、いいぜ。乗ってやろう」

——流石はアルの子孫だ。初っぱなから面白いもんが当たったものだ。

『彼』は込み上げる笑いが止まらなかった。

この『呪術師』を前にして。

怖じ気付くどころか従えろと言いつ切りやがった。気の強い方ではないだろう。見たら解る。

だが、それでも、強気に、意志は曲げない。

いくら王命とはいえ、並みの胆力でなし得ることではあるまいに。

蒼く光を跳ね返す流れるような髪に、強い光を抱いた髪と同じ色の瞳。

可愛らしい顔して、なんとまあ根性のある女だろうか。実に面白いことじゃないか。

ふと『彼』の頭に、悪友の言葉が蘇る。

『私の子孫に宜しくね』

——いいぜ、宜しくしてやろう。

こんな奴ならば、大歓迎だ。

例え千年経ったとして、『彼』は何をしようか特に決めては居なかった。

しかし、いきなり出会った人間がこれなのだ。

悪友との義理もある。

精々、退屈しない程度には付き合ってやろうか。

『彼』は、久方振りにその体を動かした。

体に巻き付いた呪術を封じる幾重もの銀鎖がジャラリと音を立てる。呪文封じにと喉へ張り付けられた魔符が乾いた音を出す。

その身を覆う黒い衣装は、闇へと彼を同化させる。

「『空間拘束』の術式は解除しています。今、貴方を縛るのは、大賢者の施した『呪力拘束』と『存在拘束』のみ。ここからはもう出られるはずですよ」

その封印とやらにかなりの信を置いているのだろつ。少女——フィオレは淡々と語る。

フィオレは踵を返すと、足早に牢を出ようとする。

動けるといふのなら、動いてやろつ。

『彼』は、立ち上がり、フィオレの背を追って牢の外へと歩き出す。

——正直、彼にとっては、封印など意味はない。

彼はやりたいようにする。そして彼は、この少女に宜しくしてやることに決めたのだ。

そこにあるのは、封印等による無粋な強制力ではない。

唯一、『彼』の意志だ。

——そして、『彼』は、大地を踏んだ。

それは、実に十世紀の時を経て、悠然と、大地を踏みしめた。

「さあて、『外』に出られた——ハッ、ハッハハハハハ！千年だ、ああ、千年振りだ！」

体は未だ拘束されたまま。両手は銀鎖に絡め取られ、呪術を封じる魔符は健在で。

それでもなお、『彼』は『自由』を感じ取る。

頬を撫でる風は勿論、通常なれば不快である、陰気な湿気すらも清々しい。

ここには、『停滞』ではなく『流動』が満ち溢れている！

「……………なんて柄じゃねえ。しかし、随分と呆気ないもんだな、アルよ」

後ろを見やれば、暗黒の穴蔵が、その口を閉じていった。

千年居座ったマイホームだったが、まったく感慨深いものが無い。

当然だろう、牢屋なのだし。

愛着を抱いてやる義理もない。

「で、どうすんだ嬢ちゃん？空を見るに、まだ朝っぱらだろ。これから何するんだ？」

『彼』は前を歩くフィオレに向き直る。

彼女と言えば、優しい心根なのだろう。

悪人とはいえ久方振りの自由を感じる間を与えてやるつもりのようにだが、彼女の前にいるのはそんな殊勝なタマではない。

高らかに嗤っていたと思いきや急に冷めだした彼に、戸惑いながらもフィオレは答えた。

「え、と。昼前に謁見の間に引き合うように言われているので、それまでは、待機です」

「待機だ？」

時刻は早朝五時。

朝日がやっどこんにちは。昼までは、およそ六時間。

「……………なんでこんな早くに出しやがった。明らかに待機時間長えだろ？」

「え、あの、緊張して、早起きしちゃったから、その……………」

威厳や風格、なんとか取り繕っていた若き賢者様は、しどろもどろに頬を染める。

何かいろいろと台無しだ。

「ヒッ、クヒハハ、クハハハハッ！は、早、早起きしちゃったから！？ヒヤハハハハ！！」

「ちょ、もう！笑わないでください！！『呪術師』がこんな人だったなんて……………！」

馬鹿笑いする『彼』に、先とは違う理由で顔を赤く染めるフィオレ。漏れる言葉は、想像していたものとの乖離から来る諦めだろうか。

「生憎、俺は生まれてこの方こんなもんだ。一体何を妄想してやがったんだ？」

「妄想してません！魔王の親友とか言うから、もっとこう、恐ろしい人だと思ってました。なのに、『呪術師』のものとして伝わる話と全然違う……………」

城へと足を進めながらも、げんなりしたように語るフィオレを、『彼』は鼻で笑ってやった。

「何が伝わってるかは知らねえが。それでも俺が『魔王の親友』であり、『呪術師』なのは本当だぜ、嬢ちゃんよ」

へらへらした態度はそのままに、一転、『彼』の纏う空気が変わる。ニヤリと、歪んだような悪辣な笑みを張り付け、そう言っただけで、フィオレはゴクリと息を飲む。

だが、すぐさま反論する。

「その、嬢ちゃんていうのやめてください。私には、フィオレっていう名前があるんです！」

「ああ、スマンね嬢ちゃん。その気になったら呼んでやるよ」

「もう……………！」

やはりこの娘は面白い。

怯えはするが、呑まれはしない。

わざわざ名前の訂正まで求めるのだ。

己の身の程を知って尚、そう言える少女と話すのが、『彼』は愉しくて仕方がない。

「——ならよお嬢ちゃん。俺だつて、名はあるんだぜ？」

「——！『呪術師』、じゃあないんですか？」

「そりゃ呼び名だ。俺だつて形有るものだ。誰だつて、名は有るさ」

「知りませんでした……文献では『呪術師』としか伝わっていませんから……………」

なんだその役に立たない文献は。

—— アルディレイタめ、俺の素晴らしき名ぐらいきちんと書き記しておけ。

『彼』は内心で悪友に対し悪態を吐く。

—— 君の名なんて、誰も気にしやしないだろう？

そんな声が帰ってきた気がした。

—— ウルセエ、阿呆が

一人で頭の中の悪友と罵り合いだした『彼』に、フィオレは率直にそれを訪ねた。

「じゃあ、貴方は、何と言うんですか？」

二人は既に王城の裏手へと差し掛かっていた。

人目に付くのは得策ではないと、忍ぶように城へと連れられていたのだ。

初めに比べれば、『彼』の口振りの成果が、幾分か緩んだフィオレの態度だったが、城に入り人目が増えればまた堅くなるだろう。

『彼』が見るに、あの態度はこの娘の精一杯の盾なのだろう。

幼いその双肩に、のし掛かる『賢者』を継ぐ者としてのプレッシャー。

そういうものに対抗する、彼女自身の心の盾。

折角の久しぶりの会話相手だ。

今の力の抜けた状態で名を名乗っておくのも悪くない。

「——よく聞いた」

むしろ、千年振りの名乗りだ。

かつて親友に、

かつて敵対者に、

かつて男に、

かつて女に、

かつて老人に、

かつて幼子に、

かつてそう名乗ったように、

この娘にも、名乗ってやろう。

「俺は『呪術師』。『呪術王』ルクリュー。ルクリュー・ベルデ・アルトリイだ。よく覚えときな、嬢ちゃん」

『魔王の親友』

『呪術師』

『呪術王』

『魔人』

あらゆる忌み名を携えた、外道に生きる人外の男。

ルクリュー・ベルデ・アルトリイは、悪辣に嗤う。

—— 此処に、『深淵』は解き放たれた

T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

:
:
:
:
:
:

開幕・零の話 呪術師は名乗りを上げる（後書き）

次回は、呪術師と勇者一行の対面でござる

四の話 呪術師は衆目に姿を晒す（前書き）

今回は接触だけです

四の話 呪術師は衆目に姿を晒す

「魔王が侵攻してきてる、ね……成る程、成る程。外じゃあそんな面白い状況になってやがったのか」

「面白くなってありません。私達にとつては、死活問題なんです。だから、使えるならば貴方の『力』すらも使うことが決定されたんです」

「はつきり言うねえ。利用するってんなら、もうちと誤魔化そうとするもんじゃねえのか？」

「私、無駄な嘘は吐かない主義ですから」

「ツク、クハハハヒ！ますますそっくりじゃねえか！！」

「何がですか？」

「ああ、こつちの話さ。気にすんな、嬢ちゃん」

「だから私の名前は……」

時は午前九時頃。

フィオレとルクリユーは、城の地下、密閉された石造りの一室に居た。

内装は革張りのソファーをはじめ高価な調度品に彩られていたが、

その部屋の本質は『牢』と変わりはない。

つまり、監視がしやすい上に、逃げ出しにくいのだ。

部屋の外では王が遣わした衛兵達が番をしており、室内には少女と男しか居なかった。

そこで交わされる会話は、片方が悪名高い『呪術師』だとは信じられないほど、雑談じみたものだった。

フィオレは相手のペースに巻き込まれつつあるのを自覚していたが、昨日までの無駄に肩肘を張った心境ではなくなっていた。

実物を目にして、想像していた虚像とのあまりの違いに、毒気を抜かれたこともある。

だが何よりも、この呪術師を名乗る黒尽くめの男に対しての恐怖心と言うものが薄まってきていた。

別に、彼が優しいとかそんなロマンティズム溢れた理由ではない。

フィオレには理由など解らなかったが、ルクリユーが彼女に接する感情に『郷愁』のようなものが感じられたからだ。

彼女は呪術師との接点など生まれてこの方勿論無かったが、彼の方は何が琴線に触れたのか、カラカラと愉快そうに嗤いながら、からかうようにフィオレに接していた。

——まあそれ自体はルクリユーの性格でもあるのだが。

結局の所、フィオレには『ルクリユー・ベルデ・アルトリイ』という人物がよく解らなかった。

対面してから四時間ほどもしか経っていないが、言動に軸がなく、ただただ愉快そうにニヤツいている、そんな風にしか見えなかった。

フィオレは思う。

こんな男がどうして魔王の親友となれたのかと。

ハア、とため息をつくフィオレに、ルクリユーはソファーに深くもたれたまま語りかける。

千年振りの柔らかさを堪能しながら、実にご機嫌な声色で。

「おいおい、若いのにため息なんて吐いてんじゃねえぜ？人生楽しまなきゃな、これ先達からの助言だ。覚えときな」

「もう……………」

——誰のせいだと思っているんだ。

そう言いたいフィオレだったが、それも無駄だと察した。

何故なら、ルクリユーの顔には解っていて言っているのだと書いてある。

「ハア……………」

若き賢者は、この数時間でどっと疲れていた。

「さて、嬢ちゃん。何時までここでダベってりゃいいんだ？」

「……………そうですね。時間になれば、召集がかかるはずですから」

何故二人はこんな所にいたのか。

それは持て余した時間を潰してただけだ。

その余白を利用して、フィオレは現在人間の置かれている状況、今代の魔王の脅威、『呪術師』を外に出すと決まった経緯などをルクリユーに教えていたのだ。

千年現世から隔たれていたルクリユーは、世情に疎いだろうと慮か
つてのことらしい。

結果、説明三割、無駄話七割となってしまうたが。

ルクリユーは退屈から解放された直後に行ったのが、変わり映えせぬ暇つぶしというなんとも皮肉な状況に内心では笑わずには居られなかった。

それでも彼からすれば、フィオレという格好の話し相手が居るのだから、牢の中にいた時の暇とは天と地ほどの差があると言えたのだが。

「じきに声が掛かるはずですが……」

フィオレがそう言うと、タイミングを見計らったかのように扉を叩く乾いた音が聞こえる。

「賢者殿、王がお呼びです。謁見の間へ参ぜよと」

「——はい。了承しました、これより参ります」

衛兵の声に是と返すと、フィオレはルクリユーに向き直る。

そこには今し方までの疲れた少女ではなく、毅然として賢者が居た。

「では、行きましょう」

「おう、了解だあ——さあて、今代の洩垂れの面ア、拝ませて貰うかね」

ニヤニヤとした笑みはそのままに、呪術師は立ち上がる。

部屋を出てすぐに、緊張した面持ちの兵士達がルクリューを囲む。四方を衛兵に囲まれながら歩くその姿は、罪人の護送という言葉がぴったりであつたが、彼の余裕は欠片も揺るがない。

彼の意識を占めているのは、噂の勇者様がどの程度の人間なのかという、それに対する興味だけだつた。

s i d e コウヤ

俺は今、謁見の間にいた。

何でも王様直々に発表することがあるらしく、城にいた者の殆ど——騎士とか、大臣の重鎮とか、魔術師の人達とか——が集められているらしい。

お、騎士さん達の中にヴァロンさんも居た。

隊長っぽい人の隣にたつてゐるな。

装備も強そうだし、やっぱり副長つてのは偉いんだな。

それにしても、何をするのか全く聞いてないんだけど、何なんだろうなあ？

今は王様が来るのを待っている状態で、他の人たちも、理由を知らない人はざわざわしてるみたいだ。

待つこともう何分だろう？ちょっと遅くないか？

「しかし何するんだろうな？」

「解りませんわ。しかし、わたくし達神殿の神官までお集めなのですから、小さなことであつたら陛下と言えども苦言を呈させていただきますわ！」

「いや、相手は国で一番偉い人なんだからさ」

隣にいるメルは待たされていることにえらくご立腹みたいだ。

だけどそのぐらいで王様に苦情って………姫様の幼なじみでもあるし、メルって意外と身分の高いお嬢様なのかな？

英雄の家系とか言ってたし、あり得ない訳じゃなさそうだな。

「——皆の者、待たせたな」

つと、王様が来たみたいだ。
やっと始まるらしい。

王様は玉座に座ると、俺の方に視線を向けていた。

なんだ？

「では今より、勇者コウヤ・ツワブキの供となりし者を発表する！」

ざわり

その言葉に、あたりはざわめきたった。

勇者の供ってことは……一緒に魔王と戦う仲間を選ぶのか！

どんな人が選ばれるのかな、かなり気になるな。

王様は、俺の名を呼び、前に出るよう促した。

みんなの視線が俺に集まるのを感じる。

な、なんか緊張するな。

「勇者よ、前へ！」

「はいっ！」

「これよりそちの仲間となる旅の供を選出する！先代になぞらえ、そちを含む五人でもって、此度の魔王を威見事討ち果たして貰いたい！」

「は、はい！」

五人、伝説の勇者とその仲間達と同じ人数。

確か先代は大賢者と騎士、剣士と巫女の四人が仲間だったんだよな。

俺の仲間は、どんな人たちなのか……

俺の期待をよそに、王様はその一人目となる仲間の名を宣言する。

「一人目は、聖霊巫女、メルティーア・マイラ・リナ・ブルームよ。前へ！」

「はい！」

おおつ、と、あちらこちらから声が挙がる。

メルの名が呼ばれ、彼女は揚々とこちらへと歩きだし俺の隣へ並んだ。

その顔は当然だと言わんばかりに澄ましていたが、俺と目が合うと花が咲いたようににこやかに笑った。

「名門ブルーム家の子弟であり、聖霊の加護をより強くその身に受けていると聞いておる。また、聖具である『聖典』の使い手であるともな。そちには聖霊の巫女として、勇者や仲間達をその加護を以て祝福してもらいたい」

「勿論ですわ！聖霊様の御力の下、勇者様のお力となります！」

王様の言葉に自信満々に返すメル。

「やはりメルティーア様こそが選ばれたな」

「うむ、当然だろう。我らが神殿きつての姫巫女なのじゃからな」

後ろを伺えば、メルと同じ格好をした神官の人達も、満足げにうなずいていた。それに対して、他の大臣さんとかは微妙な顔してるな。何でだろう？

俺としても、仲がいいメルが旅の仲間って言うのは、正直ありがたいんだけどな。

「これからよろしくな、メル！」

「はいつ、コウヤ様！」

仲間として、改めて握手をと手を差し出せば、頬を染めて握り返してくるメル。

それを見て一つ頷いて、王様はさらに次の発表へと移る。

「次に、騎士。近衛騎士隊副長、ヴァロン・ライナーよ。前へ！」

「はっ！」

またしてもあちこちでざわめきが起こる。

呼ばれた声に答えると、ヴァロンさんは厳かに歩を進め、メルと同じように俺の隣へと来た。

その振る舞いは騎士としても無駄がなく、やっぱり格好いい。

「そちが騎士隊長にも迫る剣の技を有しているのは知っておる。そちには勇者を護る盾として、騎士隊きつての精鋭たる腕に期待しておるぞ」

「はっ！拝命いたします！！」

ひざまづき臣下の礼をとったヴァロンさんは、静かに、力強く返答した。

「流石は副長だ！勇者様の供に選ばれるなんて！」

「彼ならば文句はない腕前だろう」

騎士隊や他の人たちからも賞賛の声が聞こえる。

やっぱりヴァロンさんは強いんだと思う。

彼らの声にはそんな信頼が籠もっていたから。

顔を上げたヴァロンさんが、俺に声を掛ける。

「本来ならば隊長が行くべきなのだろうが、国を空けるわけにはいかないのだな、私と言うことになった。コウヤ殿、不肖の身ながら、助力させていただく」

「そんな、こちらこそ、宜しく願いします、ヴァロンさん！一緒に頑張っていきましょう！」

「ああ、この剣に誓おう」

同じ様に握手すると、力強く笑みを返してくれる。

知り合ってまだ一日とは言え、こっちも知っている人でよかった。剣を交えたことでこの人が頼れる人だったのも解ってるし、心強いな。

次は誰なのだろう、と王様を見れば、誰かの名を呼ぶ気配はなかった。

あれ、三人だけ？

同じく疑問に思ったのか、メルが王様に問いかけた。

「陛下、後の二人はどちらの方達ですの？」

「ふむ、そうだな。先ほど呼びつけたところだ。入って参れ！」

メルの疑問への答えは返さず、王様は扉へと声を掛けた。

その二人は外にいるのかな？

ギギギと音を立てながら扉が衛兵の手で開かれる。

——ふと、耳にジャラリという鎖の音が聞こえた。

鎖？

その音に気を取られて、入ってきた人物が誰か理解するのに一寸遅れが出た。

「フィオレ？」

そう、入ってきたのはフィオレだった。

「賢者、フィオレ・ヘインストールよ。前へ」

「はい」

割れた人垣の間を歩み、こちらに向かってくるフィオレ。

二日振りに見たその凜とした顔だったけど、まさか彼女も仲間として呼ばれるとは、思わなかった。

気付けば、いつの間にかざわめきは無くなり、場は静かになっていた。

その中を進み、俺たちの横まで来ると、フィオレは王様に礼を取る。

「ヘインストール家きつての才気を持ち主だと聞いておる。そちらは『大賢者』の血筋として、その知識と魔法とを以て、勇者の支えとなることを期待しておる」

「はい。その命、我が家名に懸けまして必ずや果たして見せます」

謁見の間に、フィオレの澄んだ声が響く。

「やはりヘインストールの才媛か」

「妥当だろう。アレ以外に賢者と名乗れる者は居らんからな」

「噂では古代魔法の一部を蘇らせたとか」

「しかし何故遅れてきたのだ？」

口々に何か言う声も聞こえるが、俺は前の二人と同じように、フィ

オレに向けて手を差し出した。

「まさか君も一緒に行くなんてな。これから宜しくな、フィオレ！」

「はい、コウヤ殿」

表情は硬いが、手を握り返してはくれた。

うーん、優しい子だったのは解ってるけど、それ以外がどんな子なのかあまり解らないな。

まあいいや、旅の仲間になるんだ。

これから知っていけばいいよな。

と、王様がフィオレに確認するように訪ねた。

「して賢者よ、奴は？」

「外に居ります」

「うむ、そうか——入るがよい『呪術師』よ——！」

開いていた扉に、王様がひとときわ強く呼びかける。

——ジャラリ

そして、扉からは仰々しく四人の衛兵と、一人の人影が姿を現した。

——ジャラリ

衛兵達はその一人を囲うように立っている。

——ジャラリ

気がつけば、場は静まりかえっていた。
まるで、その人影に怯えてしまったみたいに。

——ジャラリ

鎖の音を響かせて、その男は歩いてくる。

——ジャラリ

身の丈は185センチぐらいか、大きな体躯の男。
髪は黒く、無造作に伸ばされたそれは目を覆い隠していた。
身体や、両腕には枷のように銀の鎖が巻き付き、まるで囚人のよう
だ。

首——いや、その喉には鍵のように札が貼られており、見るからに
何かを封じ込めているようで。

何より特徴的なのは、黒、黒、黒、黒——頭先从足下まで、
黒一色で統一された、闇のような格好。

——ジャラリ

ふと、俺は背中の聖剣が震えだしたのを感じた。

これは、昨晚にも感じた気がする。

そう、あの『牢獄』を前にしたときだ——

——ジャラリ

そして、その時、目がかち合った。
黒い髪の隙間から覗いた、血の様な、真っ赤な真っ赤な『紅い』眼と。

俺は、何故か解らないが、背筋に寒気が走った。

「これ、が、『呪術師』……………!？」

この人には、この男には、『コレ』には、触れてはいけない気がする——

「どういことですよ!!!!」

隣から怒鳴り声が聞こえた。

声からメル的那だと解ったが、そこには押さえきれないほどの憤怒が込められている。

メルを見やれば、その可憐な顔を怒りに真っ赤に染め、王様へと食ってかかっていた。

先ほどの、フィオレが呼ばれたときのつまらなさそうな顔は微塵も残っていない。

ヴァロンさんの方も、入ってきた男にかなり警戒しているようで、鋭い形相で睨みつけていた。

唯一フィオレだけは、変わらぬまま毅然とそこに立っていた。

「どういふことも何も、こやつが最後の勇者の供だ」

「供ですって！？よりもよって『呪術師』！？正気の沙汰ではありませんわ！！」

「巫女殿！陛下に対して無礼であろう！！」

大臣の一人がメルを叱責するが、怒りに燃えるメルは止まらない。

「黙りなさい！！陛下！わたくしは裏切り者の大罪人である『呪術師』など、認めるわけには行きませんわ！！牢から出すだけでなく、あまつさえ勇者様の供だなんて、何を考えていらっしやるのですか！！」

メルがそう怒鳴れば、時が動き出しかのように、追従するように神官達からも口々に罵声があがる。

「そ、そうですぞ！斯様なこと我ら神殿は聞いておりませぬ！」

「然り！これは聖霊様に対する重大な冒瀆ですぞ！！」

「ファージールは何を考えておいでか！？これは本山へ上申するべき、由々しき事態です！！」

それらに応じるように、騎士や大臣たちからも今までの比ではないざわめきが起った。

騒いでない人たちはこのことを知っていたのだろうけど、知らない人たちには青天の霹靂だろう。

謁見の間は、騒然とする。

聞くに耐えない罵声の嵐の標的となった王様は、眉を寄せると深く息を吸い、吠えた。

「静まれえええい！！！」

他の人々は勿論、王様の怒鳴り声に、勢いを失った神官達は口をつぐむ。

メルも同様に、黙り込むしかなかったようだ。

王様は、フン、と鼻息荒く周囲を見渡すと吐き捨てるように言う。

「これは王である余の決定である。いかに神殿の者とは言え、そこに口は挟みせん！！！」

「なんだと！？我々を軽んじるか！」

「聖霊様をなんと思つて居られる！？！」

「黙らんか！！そちらこそこの場を何処と心得ておるのだ！」

またしても吠えたてる神官達にうんざりしたように反論し、王様のため息を吐くと一人の若い魔導師が前に出た。

「それは、私から説明いたしましょう。私は、宮廷魔導師のワレフと申します」

片眼鏡をかけた細身のその魔導師は優雅に一礼し、俺や神官達の方に視線を向け、語り出した。

「——此度のことは、『大戒牢』の劣化が見つかったことに端を発します」

そう始まり、語りは続く。彼の話では、千年前の魔法で作られた牢は最近劣化が激しく、近い内に崩壊する可能性が出てきた。

そうなれば中にいる呪術師が解き放たれてしまい、大事となるので、そうなる前に枷をつけて制御下に置いてしまおうという話になったらしい。

そこで、魔導師として牢の監視に当たっていたワレフさんと、呪術師を封印した大賢者の子孫であり、呪術師を制御できる術式をもったフィオレ。

二人が協力して呪術師を外に出すとなったようだ。

「そ、そのような話！私は聞いて居らんぞ！？どういうことか！！」

確か筆頭魔導師だと言っていたガインズさんが狼狽えたような声を上げる。

しかしワレフさんはさりとしたものだ。

「申し訳ない、筆頭殿。しかし陛下直々の命だったので、お伝えするわけには行かなかったのです」

「ぐ、ぬう……………！」

悔しそうに顔をしかめたガインズさんを放って、ワレフさんはこちらを見る。

いや、正しくは俺の側にいるフィオレを。

「此処から先は、賢者殿にお任せいたしましょう」

「——はい、では、私から説明させていただきます」

説明役を譲られたフィオレは、俺たちに背を向け、室内のみんなに聞こえるように話し出す。

「私の祖先、アルデイレイタ・ヘインストールは、一つの魔法術式と、魔法具を作り出しました。それは呪術師へと施された封印具『禁制』というものです。これは、大賢者の血筋を持つ者にのみ行使できる術式であり、対象となる存在を使用者の制御下におく魔法具です」

フィオレの話では、ジャラジャラと音をあげていたあの銀の鎖が、その『禁制』という魔法具であるとか。

「まさか！」「おお、なんと………」という感嘆の声が場から挙がるが氣にとめず、フィオレは説明を続ける。

「これは大賢者が遺したとされる文献に記されていた魔法であり、信憑性はあると断じられました。したがって、陛下の命にて私とワレフ卿により呪術師を牢外へと出したのです」

それで終わりなのか、ぺこりと頭を下げ、フィオレは一步下がる。

「……だからといって！呪術師を解き放つなど危険ですわ！それに邪悪な呪術の力を許すなど、聖霊様のご意志に反します！！」

納得行かないのかメルが更に言い募ったが、王様はそれを一刀に切り捨てた。

「此度の魔王侵攻はつまり人間界の危機である！そんな時にまで聖

霊のご意志を語り、滅びを甘受するなど、王としては到底認められん！余とて一人の聖霊教の信徒であり、聖霊の門弟ではある。しかし、使える力を選び好みして良いような甘えられる状況でもないのだ！一刻も早く、世に平和をもたらし必要がある！」

「し、しかし、それはコウヤ様だけで事足りると……………」

「一刻でも早く魔王を討つことで悲痛に暮れる民もその数を減らすのだ！！ならばそちらは魔王の壺行を甘んじて見ておればよいと申すのか！！」

「っ……………！！」

反論の余地がないのか押し黙るも、苦虫を噛み潰したように苦渋の表情を見せるメル。

そのままキツとした目線でもって、フィオレを睨みつけた。

「フィオレさん、貴女、わたくしに隠れてよくもこんな真似を……………！！！！」

対するフィオレはその視線に応じることなく、凜と前を向いたままだ。

この場に、納得行かないがどうしようもない、といった雰囲気の流れ出す――

「おい、俺あ何時まで無視されりやあいなんだ？」

――空気を読まない、挑発するような声が響く。

発したのは勿論、争点となっている男、呪術師その人だった。

広間の皆の視線は、呪術師へと集中する。
それを察した王様が、咳払いを一つ。

「ごほん。うむ、では話を進めよう。皆知るとおりだが、呪術師よ、そちは大罪人であり、牢へと投じられた囚人である。その投獄は命果てるまでの無期限である」

「ああ、そうだな」

不遜な物言いにヴァロンさんや騎士さん達は殺気立つが、王様は気にした様子もなく、会話は続く。

「——だが、此度の魔王討伐にて、多大なる貢献を果たせば、その罪の減一等を認めよう」

その言葉に何度目か解らないざわめきが広がる。

伝説に近い世紀の大悪人の、その罪を減らすと言ったんだから無理はないかもしれない。

「静まれ！——呪術師よ。減一等の暁には、大賢者が血筋の者による監視は付くが、光差す場を与えよう。しかし断るならば、そちは我がファージルの誇る宮廷魔導師達を以て滅することとなるが、如何する？」

それは脅迫でしょ王様。

拒否権なんかないじゃないか。

まあ、大犯罪者相手の取り引きなんだし、そうなるのは納得できるけど。

そんな理不尽な取り引きにも関わらず、呪術師は悠然と答えを返した。

「ああ、受けようその話。人の身ながら俺を討ち果たした大賢者。彼に敬意を表し、俺は彼の血筋に一度降ろう。然らば我が呪術、彼の者達のために振るってやろう」

それは、大賢者の血筋への服従を約束したに等しい言葉だった。

あまりの潔さに、俺や王様はおろか、言われた本人のフィオレでさえも啞然としている。

ずいぶんあっさりしてるけど、呪術師って極悪人じゃなかったのか？

メルやヴァロンさんはその態度こそ怪しいみたいに眼を尖らせてるけど、呪術師は気にする風もなく、飄々としていた。

相変わらず聖剣はざわついてるけど、さっきまで感じてた寒気はもう感じないな。

「よく言った呪術師よ。委細、解ったかな勇者よ」

「あ、はい、解りました」

「ではここに、勇者の供は定まった！」

王様がそう告げると、場が少し引き締まる。

「勇者よ、巫女よ、騎士よ、賢者よ、そして呪術師よ、そちらが一

刻も早く、世に安寧をもたらすことを願って居る！」

解散！

そういう意図が込められた王様の言葉に、みんなは部屋を次々と後にする。

王様も、大臣達も、騎士さん達も居なくなってゆく。

室内に残ったのは王様の前に立っていた俺たち、そしてその3メートルぐらい後ろに居た呪術師だけだった。

あれ？衛兵達は下がっていいのかな？

呪術師一人残しとくのは、安全なのか？

「——さあて、帰るか賢者殿よ」

「ええ」

呪術師の声に、ス、と歩み出すことでフィオレが答えた。

「お待ちなさい！呪術師、貴方がどれほどの危険な存在なのかわたくしは知っております！！今は神妙にしていようがわたくしの目は騙されませんわ！！」

「巫女殿に同感だ。伝え聞く貴様の悪行を鑑みて、いくら陛下の命とは言えど、易々と信ずるわけにはいかん……！！」

敵対心露わに呪術師に身構える二人を、俺は手で制した。

「二人とも！ちょっと抑えよう！」

「しかし……」

「いくらコウヤ様と言えども、これはお譲りできません!」

「つてもなあ。王様もあ言つてたんだし、いきなり仲良くとは言わないけどさ。今は我慢するしかないって」

俺が宥めてもあまり効果はないみたいだけど。
ふと、呪術師の方を見ると何故か笑っていた。

メルがそれに気づき、またも声を荒げる。

「なにが可笑しいんですの!!」

「ハッハッ、いや、いや。別に可笑しい訳じゃない——」

ニヤニヤと、なんかバカにしたような笑みを浮かべながら呪術師はこつちを、俺を見た。

「な、なんだよ?」

「——成る程、成る程。今回もまた、潰垂れか」

なっ!?

潰垂れえ!?

あまりの物言いに俺が固まっていると、呪術師はクハハハハ、と嗤い声を挙げながら去っていった。

「あ、あのコウヤ殿、私はお先に失礼します。ちょっと！待ってください！」

慌てたように一言残しその後を追うフィオレ。

去り際にフィオレが頭を下げていったが、その時の表情は、やけに疲れたものに見えた。

「な、何なんだ、一体……………？」

あれが、先代魔王の親友？
最悪の犯罪者？

……………なんだかなあ

T o B e C o n t i n u e d

四の話 呪術師は衆目に姿を晒す（後書き）

次回は呪術師の思考です

五の話 呪術師は酒を呑む

「冗談ではありませんわ……………！？まさか、まさかこんな馬鹿げたことがまかり通るだなんて……………！」

二束の金髪を振り乱しながら、少女はファージール城の廊下をツンズンと歩いていく。

少女——メルティーアはひどく不機嫌だった。

それもこれも全てはこの日の午前の謁見の間での事態に依るものだ。

（昨日までは巧くいつてましたのに……………！フィオレさんも不要な真似ばかりしてくれますわ！！）

メルティーアは、神殿に所属する聖霊教の巫女だ。彼女の価値基準は、まず聖霊を第一としている。

彼女の家系が熱烈な信徒であり、その中でも名門であることから彼女は幼い頃から徹底された教育を施されてきた。

また『聖人』と言われた祖先と同じように、彼女にもその素質があった。

『聖典』と呼ばれる聖書型聖具の使い手として選ばれるほどに、生まれながらの聖霊の加護の受け手だった。

それを知った彼女の両親はますます彼女に期待し、神殿の者達は「聖なる若き姫巫女」として彼女を可愛がった。

それこそメルティーアが、自分は『特別な人間』だと勘違いしてしまうほどに。

そうついた経緯から、彼女の16年の人生は概ね順風満帆だった。

それは、今回の『勇者召還の一連』に関しても言えることだった。発端は、現在の神殿長である彼女の祖父が発した神託だった。

『魔王の暴虐を阻止するために、聖霊様が遣わせし光の勇者が降臨するだろう。その者かつての勇者と同じく、聖霊様の加護を以て、世界の憂いを断ち切る聖剣となるだろう』

と、メルティアーの祖父は触れを出した。

それを受けた神殿はすぐさま行動に移り、聖霊教の総本山である口プロス聖王国の大神殿に打診、許可を取得。

大神殿からファージールへの要請も通った。

同時にファージール内部の反神殿勢力に隠匿したまま、敬虔な聖霊教信徒である宮廷筆頭魔導師ガインズ卿に内密に協力を要請する。

これらの根回しが功を奏し、総本山からの要請ともなれば形式上は聖霊教の信徒であるファージール王は『勇者召還』を受諾するしかなかった。

以前より神殿が政務に口を挟むのを疎んじていた王は初めは難色を示したが、実際に魔王の脅威は存在し『勇者召還』が有効なこともまた事実。

それ以外にも『勇者』を自国に得ることの利益も鑑みられた。

そう言った打算も絡み合い王以下大臣達も了承することと相成ったのだが、そう言った駆け引きはメルティアーの預かり知らぬところであつた。

何にせよ勇者召還は成功し、勇者はこの世界に降りたつた。

成功を聞いた時神殿に居たメルティアーは早速とばかりに翌日、勇者を訪ね——そこで彼女は『運命』を確信する。

勇者である少年は彼女から見ても整った顔立ちであり、容姿は申し分ない。

聖霊の加護も多大に受けているようで、聖具である『聖剣』すらも難なく抜く、所謂「アタリ」だった。

『やはりこの方が聖霊様の遣わせし勇者様！聖霊様に愛されたわたくしに相応しいお方ですわ！』

メルティーアの頭脳は、この邂逅こそは自らに与えられた『運命』であるのだと結論を弾き出す。

確かに勇者は見目もよく、聖霊の寵愛も申し分ない。メルティーアが『恋をする』対象にはもってこいだった。

そこには打算が有ったかもしれないが、彼女にとってそれは間違いない『恋』だったのだ。

少なくとも、勇者は彼女が『乞い』した存在ではあった。

そうして、その恋を成就すべく行動に移す。

初対面時から勇者を自分の物と出来るように、それらしい立ち回りをした。

見ず知らずの土地に放り出された勇者の『支え』となれるように。

果たして、それは巧くいくこととなった。

『恋』する乙女は強しといったもので、まだ出会って二日ながらかなりの信頼を得たと言えるだろう。

勇者はメルティーアに好意的であり、こちらは彼女からすれば当然ではあるが、魔王討伐の一員にも選ばれた。

勇者も、魔王打破の英雄の座も、難なく手に入れることができる所まで手が届いたのだ――

——だが、ここに来て、不安要素が現れた。

それが不機嫌の最たる理由である『呪術師』の存在であった。聖霊教の巫女として、遙か昔に聖霊様を裏切り魔族の技たる呪術道に身を堕とした大逆人。

それが神殿から見た『呪術師』であり、メルティーアもそう考えていた。

そんな存在ならば即時滅すべきだという意見も多く挙がるのだが、歴史に名高き大賢者ですら封印と言う形にしか収められなかったという現実がある。

故に、地下深くへの封印という処置に妥協していたのだ。

（それを外に出す？あまつさえ自由にする？陛下がこんなに頭の悪い人間だとは知りませんでしたわ！！）

一国の王に対して実に不遜な、下手をしなくても首を切られるような無礼なことを考えるメルティーア。これは、幼い頃から王を見てきた気安さから出る迂闊さ故だろう。

その迂闊が許されてしまうのも、事実ではあったが。

神殿長の孫であり英雄の一門である彼女は幼い頃より城に出入りしていたし、年が王女殿下と同じであるという理由から、当然のごとく知り合い幼なじみと呼べる間柄となった。

しかしそこには緩い友情など存在せず、どちらかと言えば腹をさぐり合うような関係だった。

現王の以前から神殿を疎外しようと画策していた王家側であるから、不仲なのは当然と言ってもいい。

表面上は平和なものだが、利権を懸けた権謀術数が繰り広げられてきたのだ。

次代を担う少女達の関係も、それと酷似している。

先代の勇者は当時の姫という鎖によって王家に飼い慣らされたと言っても過言ではない。

魔王無き後の権力図は、勇者を手にした王家に傾いた。

此度も同じ手が使われないとは限らないからこそ、メルティーアはあの緩やかな顔をしながらも抜け目のない王女を警戒しているのだ。

——そして彼女が不機嫌となるもう一つの理由は、もう一人の幼なじみによる。

そう、フィオレ・ヘインストールの所為だ。

（昔から昔からわたしくしの邪魔ばかり……）

メルティーア、イリーナ姫、フィオレの三人は皆同年であり、それぞれ千年前の英雄の血を引いている。

最近はヘインストール家は勢力図としては弱体化してきてはいるが、それでも名門には違いない。

王家であるイリーナはともかく、メルティーアとフィオレは昔から周りの大人達によく比較対象として扱われていた。

同年で幼なじみ、同じ英雄の子孫で二人とも見目麗しい美少女である。

嗜好きな宮廷貴族達には話題にするには格好の的というわけだ。

片や魔導の天才的な素質を持ち、失われし古代魔法を幾許かとは言え再現した『賢者』を名乗る才媛。

片や主神である聖霊の強気加護を受け、神殿の宝物である聖典を使いこなす『姫巫女』。

不遜な態度が目立つメルティーアとは真逆に、フィオレは堅物で

真面目な性格だった。

イリーナ姫を間に挟んだ手前辛辣なまでに仲違いはしていなかったが、その関係は——少なくともメルティーアはフィオレの事が好きではなかった。

そりが合わず、メルティーアが嫌みを言っても冷静に受け流すましたフィオレの態度は、メルティーアにとっては目障りでしかない。

何故この三人が幼なじみなのかと聞かれれば、産まれた年が同じだという不幸によるとしか答えられない。

だからこそ、フィオレなぞに負けないようにメルティーアは巫女として名実ともに力を付け、この度勇者の仲間選ばれたのだ。

それがどうだ。

フィオレが旅の供に選ばれるのは想定内だ。

曲がりなりにも『賢者』であり、先代をなぞらえるならばパーティには入れられるだろうと考えはした。

そのためにこの二日は勇者に付きつきりで、フィオレが勇者に近づく機会など与えなかった。

メルティーアが勇者に会う直前に少しばかり顔を会わせはしたようだが、その時見たフィオレはいつも通りの無愛想なクールぶった鉄面皮であった。

勇者に粉を掛けるような真似はしていないのも、何だかんだと付き合いの長いメルティーアには解る。

あとはゆつくりと旅の中で勇者との仲を確固たる物にしていけばいい、そう考えていた。

だが蓋を開けてみれば、殊更不快な事態となった。誰が好き好んで大敵たる呪術師と仲良く魔王討伐に向かわなければならぬのか。王の一喝の手前引き下がるしかなかったが、メルティーアは納得していない。

「見ていなさいフィオレさん、『呪術師』、そしてイリーナさん……貴方方の好きにはさせませんわよ………！」

今はこの怒りを糧に、神殿に戻り早急に対処を考えるのが先決だ。

——『概ね』順風満帆な彼女の人生、その中で唯一と言っている『例外』………それこそがメルティーアの幼なじみ二人の存在。

メルティーアは二人の少女に敵対心を燃やしながら、ファージール王城を後にした。

——その頃、件の幼なじみ二人、その片割れであるイリーナ姫はコウヤと供にいた。

勇者に一言掛けるやいなや謁見の間を辞した怒りに燃えるメルティーアは、イリーナが勇者に近付くことに釘を刺すのを失念していた。

その機を逃すことなく、部屋に戻る直前のコウヤに声を掛け、少しサロンにて話をする事となったのだ。

姫にいきなりお茶に誘われたコウヤはというと、二人きりでお茶という状況に改めてドキドキしていた。侍女達により着々と用意さ

れてゆく茶席の用意を傍目に、コウヤは相変わらずにこにこと笑みを湛えているイリーナを見る。

「どうかなさいまして？」

「えっ！？いや、こういうのはあんまり慣れてないもので……なんか緊張しちゃってさ」

「フッフ、力を抜いていただいてもかまいませんよ？私は少しコウヤ様とお話がしたかっただけですもの」

コウヤの視線に気づき可愛らしく首を傾げたイリーナだったが、コウヤの言葉にまた柔らかく微笑んで返した。

そう言われても、コウヤとしては簡単に緊張が抜けるわけでもない。

「俺のいた国ではさ、こういうのは殆ど廃れてたから……ほんの一部の人達が楽しんでたぐらいなんだよ」

出された紅茶を恐る恐る口に含みつつ、コウヤは高価な調度品に彩られたサロンを見渡す。

貴族同士の交流に用いられるその部屋は華美という言葉が最もしっくりくるだろう。

そんな場の空気に飲まれながらも、コウヤはイリーナと会話を交わしつつ彼なりに茶会を楽しんでいた。

見た目通りに終始たおやかな空気を纏うイリーナに、コウヤの緊張も解れ、次第に肩の力が抜けていく。それを見計らったが如く、イリーナは切り出した。

「ひとつ、コウヤ様をお願いしたいことがありますの」

「えっ？」

「コウヤ様、フィオレさんのことをどうか宜しくお願いします」

テーブル越しに、イリーナは頭を下げた。

コウヤの手が微動し、ティーカップがカチャリと音を立てる。

それは……と、コウヤがイリーナを見やれば、彼女は言葉を続けた。

「あの子は、昔からこれと決めたら何でも一人で抱え込んでしまつて……今回のことでも、おそらく相当に気を張っているのだと思うのです」

（あー、確かに、真面目そうだな）

憂い息を吐くイリーナの言葉に、コウヤは内心で納得していた。確かに件の少女は、生真面目そうな印象だったと思い出す。

昼間の謁見の間でもそうだったが、魔王討伐の一件ではかなり肩に力を入れていそうだ。

「あの子は私などよりずっと賢いのに、ずっと不器用だわ」

つまり、眼前の姫は幼馴染みである少女を心配し、旅先での身を案じているのだろう。なんとも麗しき友情である。

そういう思いに触れると、コウヤという男は俄然やる気を見せるのだ。

「ああ、分かった、任せてくれ。俺がどこまで役に立つかはわからないけど、出来るだけのことはするよ」

「ありがとうございます」

爽やかに笑って見せたコウヤに、イリーナも相好を崩した。

そこで終わっていればこの朗らかな空気も維持できたのだろうが、フィオレのことを話題にしたせい、コウヤはそこから派生する話題を連想してしまった。

言うまでもない。呪術師のことだった。

「あのさ、イリーナ。ちょっと教えてほしいんだけど、あの呪術師って人は、その、どういう奴なんだろう？」

自分で言うておきながら何とも曖昧な問い方だと、コウヤは思った。しかし、実際になんとも形容しがたい思いが、彼の中で燦っているのだ。

その出所は、『呪術を知らない』という無知から来る不安なのかもしれない。

呪術師の名を出したことにより、イリーナの笑顔が幾分か硬さを増した。

「……コウヤ様がお知りの通り、彼は前魔王の友であり、裏切りの罪人です。世間の認識としては、それが全てでしょう。しかし、彼の性質などについては、残された資料が乏しいためによく分かっていないのです」

「でも確か、フィオレのご先祖さまが残した魔導書のお陰で大人しくさせられるんだろ？」

「ええ。呪術師について記されているのは、『大賢者』が遺した魔導書と、彼の随筆書のみなのです。それ故に、彼の末裔たるフィオレに白羽の矢が立った、と」

そこで言葉を止め、イリーナは息をついた。幼馴染みの境遇を思えば憂いもあるのだらうと、コウヤは思った。

「大賢者の記した話に基づけば、『呪術師は人知を軽んずる異端。力は絶大。英雄をして匹敵せし魔人。殺し尽くすに能わざる人外』そして、『性質は悪辣にして享樂的。悪たるをすべてと成す』とも」

「そんな危なそうなのを連れていくのか……」

イリーナの憂鬱の原因もよく分かる。そのような危険人物が幼馴染みの側に居るなど、正気の沙汰では歓迎できない。

それ以前に、いくら有用だからとそんな人物を起用した王に対して、コウヤは不満を抱いた。

（そんな人と旅とか、大丈夫なのかな……）

コウヤは、前向きになる努力はしてみたが、そんなものを嘲笑うかのような爆弾を抱えさせられた気分だった。

話を聞けば聞くほど、フィオレを宜しく頼まれたことが、かなりの大任に思われた。

コウヤの『出来る限り』なぞ、そんな弩級の爆弾の前では、無力ではないだろうか？

「……よし、明日から訓練がんばるぞー！」

少なくとも、抵抗ぐらいは出来るようになるろつ。

悲壮な決心を固め、いつの間にか渴ききつた喉を潤そうと、コウヤは無作法ながらも紅茶を煽った。

「――あ」

ティーカップは、既に空だった。

ヘインストールの屋敷は、王城より数区画離れた、都の西端にあった。

屋敷の表には煌々と篝火が焚かれ、十人単位の兵士が屯している。その物々しさは、今から討ち入りでも始まるのかのようだった。

反面、門の中は静まりかえっていた。屋敷の中はがらんとしており、名門の家とは思えないほど、質素な佇まいだった。最早、寒々しいとまで言えるほどだ。

屋敷の大きさにはそぐわない住人の少なさも、その一因だった。

そんな屋敷の裏の、さらに向こうにそれはあった。

「……勝手にうるつかないください。居なくなっても、封印の効果でああなたの居場所は瞬時に特定できます」

「逃げらんねえってんだろ？耳タコだ、んなこたあ」

呪術師、ルクリユーは、少女に背を向けたまま、ぞんざいに答えた。彼の意識は背後の少女ではなく、眼前の墓標に向いている。

簡素な、それでいて年季を感じさせる石造りの小さな墓標だ。とつぷりと浸かった夜の暗闇の中で、その白い石碑は淡く存在していた。

そこは崖の端だった。昼間ならば見晴らしが良いことだろうが、生憎と、今は闇しか見えていない。

そんな景色を背に、墓標はポツリと立っていた。

「こんなところで寝たがるとは、相変わらず酔狂な奴だよなあ、アルデイレイタ」

どこから持ち出したのか、ルクリユーの片手にはワインがあった。その銘柄に屋敷の保管庫で見覚えがあったフィオレは、人知れず小さく眉を寄せた。

彼女は酒を嗜まないのに惜しくはない。「いつの間に」、という苦笑のようなものだった。

既にコルクが抜かれた瓶を、ルクリユーは傾けた。血のように赤い液体が、喉を通る。

「ふん、千年ぶりにしちゃあ、上出来だな。お前にくれてやるにやあ勿体ねえ」

お気に召したのだろう。心なしか声を弾ませ、呪術師は目を細める。

彼なりの、再会の手向けだ。

墓石には二つの名が刻まれていた。長年の風雨に晒され続けたそれは劣化していて読めたものではないが、ルクリユーにはそれが誰の墓かは分かっていた。

暫く、静かな時間が続いた。

フィオレも、何かを察してか口を閉ざしたまま呪術師の背中を見つめていた。

ふと、思い立ったように、ルクリューが口を開いた。

「なあ嬢ちゃん」

「何でしょうか」

「何でこんなところに墓建ててんだ。こいつあ、曲がりなりにも英雄サマだろうよ」

嫌われてたのか？、と、失礼なことを嘯くルクリューに、フィオレはまたも秀麗な眉目を歪めた。

「一族の霊廟は別にありますよ。これは、大賢者の私的な墓です。彼の遺言で、彼とその細君の名を刻み、建てられたと聞いています。『心は、この地で眠る』、と」

「……カツ、スかした台詞だな。しかしまあ、奴らしい」

そこで、会話は再び途切れた。二度目の沈黙は重く、そこには侵しがたい神妙な空気があった。

千年の歴史の再認識。その含蓄がどれ程のものかは、二十年も生きていないフィオレには及びもつかなかった。

少なくとも、あれだけ人を食ったこの男を黙らせる程度には、思いのだろう。

そんなことを考えてしまったせい、ルクリューはなんの前触れもなしにすくりと立ち上がる。

あまりの急挙動に、フィオレはビクリと肩を震わせた。

「い、いきなりなんですか？」

「どうした嬢ちゃん、わざわざ付き合ってくれねエでも、先に帰ってくれていいんだぜ？」

振り向いたルクリューは、既にあの胡散臭いニヤリ笑いを張り付けていた。先ほどの神妙さは、既に死んだ。

「あ、貴方を見張ってるんです！また勝手に動かれては、困りますから」

「そうかい、まあ、子供に夜更かしさせちゃあ悪いよなア。いやあ、悪い悪い。そんじゃあ帰るかよ」

悪びれた様子もなくしれつと言い捨てると、ルクリューはさつさと歩き出していた。

ジャラジャラと鎖を鳴らしながら、次第に遠ざかる黒ずくめの男の背中に向けて、フィオレは恨みがましい視線を送る。

「はあ。あと、一週間も……」

魔王討伐の旅は、勇者の促成修行やその他準備期間なども鑑みて、一週間後に出発が決まっている。

王都で呪術師を一週間も野放しにするのは許されたことではなく、呪術師はヘインストールの屋敷で預かることとなっていた。

警備の兵をわざわざ十人も着け、決して逃げられないように。

使役者たるフィオレも、あれやこれやと理由をつけられ押し込められた。

体のいい軟禁であつた。

旅が始まる前から気疲れが溜まりそうだと、フィオレはこの一週間の長さを予見しながら、ルクリューの背中を追い歩き始めた。

すべては、これからなのだ。

t o b e c o n t i n u e d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8264m/>

城下牢の呪術王

2011年12月3日14時48分発行